

日本工藝名鑑

(下編)

特260

438

6 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



45260
438

編纂 美術日報社出版部



本日
工藝名鑑

竟山絲定題



(編下)



發行所 美術日報社

工藝美術家詳傳

下 編 目 次

<p>▲い(る)之部</p> <p>伊藤鐵石……………一六 飯塚琅玕齋……………三七 伊東陶山……………四〇 稻葉七穂……………四七 伊東翠壺……………五六 伊藤正見……………六二 井高歸山……………七三 岩村光眞……………八四 板谷波山……………八七 市岡紫雲……………九七 池田泰山……………一〇六 石野龍山……………一〇八 岩村貞藏……………一一一 岩田藤七……………一二四 飯田勝美……………一二二 ▲ろ之部 六角紫水……………七五</p>	<p>▲は之部</p> <p>濱田金太郎……………一一 早川尙古齋……………一二 林不二男……………一〇一 般若富久造……………一一三 秦藏六……………一二〇 ▲ミ之部 富樫光成……………二八 堂本五三良……………二九 戸嶋光孚……………九〇 ▲を(お)之部 大野忠二……………二 大嶋如雲……………二七 太田春景……………三九 大串長春……………五〇 大國柏齋……………八一 小野嶋知文……………八九 奥村定一……………一〇一</p>	<p>▲わ之部</p> <p>和田和一齋……………一四 和田桐山……………六三 渡邊萬里……………六七 ▲か之部 笠井不仙……………二五 加藤雪谷……………三一 河村蜻山……………四四 香取秀眞……………四六 河井寛二郎……………四八 河内宗明……………五九 川口浮舟……………六〇 香取正彦……………七〇 神阪雪佳……………八二 河合卯之助……………一二一 ▲た之部 高田寛治……………六 田中主水……………一九</p>	<p>高田小三郎……………二三 竹村定雄……………二四 田邊竹雲齋……………九三 龍村平藏……………九五 高木治良兵衛……………一〇〇 高橋清山……………一〇四 ▲つ之部 土山隆克……………一 津田信夫……………七九 ▲な之部 永田純夫……………三三 中嶋保美……………三四 中川道正……………七八 永堀芳雲……………九八 内藤俊一……………一四 ▲む之部 村田直光……………七 村中乾泰……………八八</p>
--	--	---	--

▲う 之 部	▲ま 之 部	▲さ 之 部	▲し 之 部	▲ひ 之 部	▲も 之 部	▲す 之 部
内嶋北朗……………一〇	眞清水藏六……………五八	穂山竹林齋……………一〇二	宮永東山……………八五	平井汲哉……………一八	森野嘉光……………五一	諏訪蘇山……………二〇
宇野仁松……………三六	松本勝次……………六九	▲さ 之 部	宮本忠平……………九八	蛭川菊次郎……………二六	▲す 之 部	杉原兵才……………七四
海野清……………六四	蒔田三千藏……………七一	齋藤富ト……………四二	宮澤均……………一〇二	▲ひ 之 部	▲も 之 部	鈴木玩々齋……………七六
魚野自醒……………八六	前田竹房齋……………九六	佐藤美崇……………五二	三上治三郎……………一二	嶋野三秋……………三八	▲し 之 部	鈴木表朝……………一〇三
梅村芥舟……………一〇五	▲け 之 部	崎川羊谷……………一〇六	溝口安太良……………一八	▲し 之 部	▲し 之 部	鈴木美彦……………一〇七
植松包美……………一七	玄鶴堂壽水……………八	佐々木魚堂……………一九	▲し 之 部	▲し 之 部	▲し 之 部	濟本義之助……………一五
▲く 之 部	▲ふ 之 部	▲き 之 部	▲し 之 部	▲ひ 之 部	▲も 之 部	▲す 之 部
楠部彌一……………五三	古橋留吉……………九七	清風與平……………四五	嶋野三秋……………三八	▲ひ 之 部	▲も 之 部	▲す 之 部
黒田宗傳……………六五	▲こ 之 部	北原千祿……………六六	▲ひ 之 部	▲ひ 之 部	▲も 之 部	▲す 之 部
久須來郎……………一〇九	小林美春……………三	清水六兵衛……………八三	▲ひ 之 部	▲ひ 之 部	▲も 之 部	▲す 之 部
▲や 之 部	迎田秋悦……………四一	木村臥山……………九四	▲ひ 之 部	▲ひ 之 部	▲も 之 部	▲す 之 部
山下巧竹齋……………五	小笹樂山……………九九	錦光山誠一郎……………一〇	▲ひ 之 部	▲ひ 之 部	▲も 之 部	▲す 之 部
山本笙園……………二三	後藤駒雄……………一〇五	▲ゆ 之 部	▲ひ 之 部	▲ひ 之 部	▲も 之 部	▲す 之 部
山田清次郎……………二一	▲あ 之 部	湯淺守一……………七二	▲ひ 之 部	▲ひ 之 部	▲も 之 部	▲す 之 部
山鹿清華……………三〇	芦田眞七……………九	▲み 之 部	▲ひ 之 部	▲ひ 之 部	▲も 之 部	▲す 之 部
山崎光洋……………五七	新井謙也……………四九	三木玉眞……………四	▲ひ 之 部	▲ひ 之 部	▲も 之 部	▲す 之 部
山田樂全……………六八	淺見五郎助……………五四	三好彌次兵衛……………二二	▲ひ 之 部	▲ひ 之 部	▲も 之 部	▲す 之 部
安原祥憲……………九二	淺井清豊……………五五	宮川香山……………三二	▲ひ 之 部	▲ひ 之 部	▲も 之 部	▲す 之 部
山野長江……………一三	赤塚自得……………八〇	皆川月華……………五〇	▲ひ 之 部	▲ひ 之 部	▲も 之 部	▲す 之 部

土 山 隆 克

明治十一年十二月生
 出生地 和泉、舊伯太藩士
 現住 大阪市南區末吉橋通三ノ八



君は丸谷隆房氏の五男にして、幼時土山氏を繼ぐ、天性温良勤勉の人にして、日本畫を深田直城氏に、圖學を松原三五郎氏に、圖案を大森惟中氏に學びて其堂に上る。

日露戰役には輻重兵曹長として従軍し、役後勳七等を賜はる、大阪に於ける個人として圖案製作所を建設せるは君を以て嚆矢とす。

君の今日迄踏み來れる地歩を一顧すれば

- 一、浪花繪畫圖案展覽會委員及審査員
- 一、電氣大博覽會委員

一、現任大阪府工藝協會評議員及審査員
 一、大阪市美術協會幹事及審査員
 一、大阪市教化委員
 猶、大阪市美術協會第三回展覽會の當初、圖案部の設置されしは實に君の努力大きに居る。君の如きは實に大阪圖案界の恩人にして、又斯道の木鐸として感謝すべき人である。

【大 野 忠 二】

(11)

大 野 忠 二

明治十九年五月一日生
出生地 大 阪 市 和 泉 町
現 住 大 阪 市 住 吉 區 天 王 寺 町 五 八 三 ノ 一

君は幼より藝術的素質に富み明治四十三年京都美術工藝學校を出で、其より東京三越圖案部に出勤、次で大阪大丸呉服店の圖案部長に榮轉し、現に其地位にあり、且つ大阪府工藝協會及大阪市美術協會の審査員並に評議員である、

資性格謹廉直にして又風騷の氣に富む。

× × × × ×

趣味として俳句、和歌、邦樂に精しく、餘技として染織に巧なり、今君が數島の咏草を摘録すれば

「あまつかさ力むるわざさ繪筆もてさ

あなたづゝし拙なきわれは」



雅號は畫に青美、俳句に遊民、圖案に冲辭等あるが如く、この方面に於ても既に堂々一家を成す、其學友として京都の山鹿精華、森守明（共に帝展昨年の特選）氏等あり、常に相往來して藝術の進歩向上を勵みつゝ、あれば其大成や期して待つべし。

小 林 美 春

明治二十年生
出生地 東 京 市
現 住 大 阪 市 東 成 區 片 江 町 三 七 〇 番

初の東京にて彫金の技を海野美盛に學ぶ、次で大正十二年大震災の爲に大阪に移住し、更に中島保美氏に技法を問ひ一家を成す、由來君の家は彫金を以て父祖三世相承け、先天的技巧を有す。

× × × × ×

其作は東京金工協會に出品して賞を得るこゝに二回、東京府工藝競技會にも入賞す、次で大阪市美術協會展にて協會賞を大阪府工藝展に銀賞を、米國費府に於ける萬國博にも入賞、此他 先帝陛下の銀婚式に、又 今上陛下御登極大禮に當り



大阪よりの献上品にも他の作家と共に其一部分を擔當して精進せり。

【小 林 美 春】

(11)

【高岡寛治】

(六)

高岡寛治

明治二十八年十月生
出生地 兵庫縣尼ヶ崎町字大物町
現住 兵庫縣川邊郡神津村岩屋五三一

君は福永勝平氏の二男に生れ、幼にして遠成高岡清左衛門氏の養嗣子となる、明治四十二年先代の歿後家名を継ぎ祖業を營む。



夙に書畫美術を愛好し、一種の天才を有す、家業の農事の傍ら、漢詩を學び書畫を研究し、又大正十四年中、偶彫刻界の先達平井鳩齋翁が萬國博覽會出品作をなすべく、伊丹町に淹留するに際し、君は一日翁の門を敲きて相語り、大に感發する所あり、終に翁の門に入りて其指導を受け、耕耘の餘暇専心鐵筆彫刻に、没頭して大に會得する所あり、更に南宗の

大家柳島竹外氏の高弟水野竹峰氏に師事し、鐵筆と相待つて日々その進境を見、昭和元年の大阪市展には入選の榮を荷ふた。



村田直光

慶應三年生
出生地 大阪 市
現住 大阪市西區北堀江上通四丁目二番地



一政齋と號す、年十三にして珊瑚の彫刻を學び、十九歳より更に象牙彫刻を一遊齋直春翁に就き研究し其妙諦に通じ、廿二歳より獨立して門戸を立て遂に今日に至り、聲名漸く揚り、技術愈熟達し、及門の子弟多し。

君は大阪工藝協會委員として令名あり、先年 攝政宮殿下大阪行啓の際には謹作「立雛」お買上の光榮に浴した、又昭和四年五月 天皇陛下大阪市行幸の砌り大阪市献上品「浪速港文様文具匣」中のペン軸、ナイフ、吸取器等象牙細工謹作の

光榮を給ふ。

君の彫刻に没頭するこゝに實に前後五十年、其間の製作数は積んで邱をも築くべく、其佳品に至つて常に内外鑑賞家をして驚歎せしめ、斯道に貢獻するこゝ亦た大なりと謂ふべし。

【村田直光】

(七)



【玄鶴堂 壽水】

玄鶴堂 壽水

明治廿一年十月生
出生地 大阪市南區溝之側
現住 大阪市西成區三日路町六〇

(八)

姓は松澤、君の家は代々錫器製作を以て聞へ、特に家殿は斯道の名匠であつた。君は幼より家殿を師として其技を練磨し、佳作が多い。



今その作品の光榮を得たるものに付き一二を擧ぐれば
大正十四年 攝政宮殿下の大政行啓の御「鈍錫鳳字式茶壺」
を台覽に供へ、又大正十一年四月皇后陛下行啓の際には鈍錫
の「香合」を献上して嘉納せらる。

× × × × × ×

現在公共団体員としては大阪市美術協會評議員、大阪府工

藝協會員たり、府の工藝展には展出品し銅牌の名譽を博す。

人となり温厚朴實、業務に精勵し令聞風に聞ゆ。

【芦田 眞七】

芦田 眞七

明治五年八月十五日生
現住 大阪市東區北濱三丁目

(九)

木好軒又眞阿彌號す、幼より家殿木好軒翁に就き指物の秘訣を研究し、明治廿八年内國勸業博覽會に出品し、該作は宮内省御買上となり、此他各地博覽會及共進會等に出品して金銀賞を受け、又農商務省の指定品として巴里に於ける萬國博覽會に出品して入賞す。



明治卅六年特に北白川宮家御買上を賜はり、續いて英國皇太子殿下が我が皇室御訪問の際、大阪市の手を経て作品を献上す、次で大正三年の大阪に陸軍大演習に 皇太子殿下に作品を献上する等、幾多の光榮に浴し、君の作品は益江湖に認めらるゝに至つた。

君の斯界に於ける地位としては指物組合評議員、美術協會審査員、工藝協會理事を重任さる。此の如く君は熱心なる斯道の研究家にして、其作品の優雅高逸なるは夙に世の認むる所で、其人格亦た高潔にして荷花の泥中に匂ふが如し。

【内 嶋 北 朗】

(10)

内 嶋 北 朗

明治二十五年八月生
出生地 富山縣高岡市
現 住 京都市今熊野南日吉町

君は夙に陶器に興味を有し、且つ天資的藝術上の素質に富む、其陶器に没頭したのは大正元年で、爾來越後、東京



瀬戸、京都に順々に實地研鑽を積み、今や京都に居を占め、
製作に研究に全身を捧げてゐる。

× × × × × ×

君の純真なる研究は忽ち其製作の上に實現されて、公私諸
展に屢上選好評を博し、青年作家として其前途に大なる期待

を囑されてゐる。現に耀々會員としての輝々である。

【濱 田 金 太 郎】

(11)

濱 田 金 太 郎

文久三年十月五日生
出生地 鹿兒島縣鹿兒島郡櫻島
現 住 大阪府中河内郡布施町東足代

君は明治十年上阪、大國柏齋に就き金工の技を學ぶこと二十年、一家を成すと共に獨立今日に及ぶ。

× × × × × ×



其作は明治四十五年大日本實業博覽會に出品して金銀牌を
又大正元年大日本共産博覽會に銀牌を受く。

以上の功績より見れば君の金工に於ける造詣の深く其作品の
精妙にして且つ其人格の堅確なる事を推知するに足らむ。

× × × × × ×

現に大正の初め大阪市にて創立せる美術協會及工藝協會、金屬工藝協會等の會員又は幹事として盡瘁せり。

【早川尚古齋】

(111)

早川尚古齋

明治三十五年生
出生地 大阪市東區笠屋町五〇番
現住同 上



初代尚古齋氏は大阪竹工界の鼻祖として名あり、其技亦た老練輕妙であつた。今の第四世たる君は夙に父祖の傳統により其妙處を舐得した。而して三世の父君長逝後は竹工界も一時寂寥の感ありしが、近年に至り復た隆然として竹藝熱が勃興して來た。此間にあり君は傳統の外に更に創作の上に想を練り工夫を凝らし、其處に竹工界に一新紀元を策せんとしてゐる。

X X X X X

初代以來の作品は或は帝室御買上げ並に献上、或は天覽に浴せし等殆んき數ふるに暇まなく、又各地の博覽會等にも出品して屢入賞名聲を博せることは世間既に周知の事である。

君は趣味として何等之なく、唯その本藝に精進し、一作を得る毎に否な快心の作の成るのを以て無二の樂とし、家庭亦た圓滿にして春日の麗々たるが如し。

【山本笙園】

(112)

山本笙園

明治二年一月一日生
出生地 大阪市北區樋之上町
現住同 上



君名は親、字は有成、通稱太助、笙園(昭和三年五月笙園改名、竹龍齋名は息龍齋氏に譲る)は其號にして、別に其室に題して天馬山房瑞雲といふ。父は柳伊兵衛、明治四年歿し、母辰子太田氏同廿七年逝く、君十八歳にして出て山本家を襲ぐ。幼より頭悟機敏、最も竹工を嗜み、且つ深く斯道を研鑽した。其作品は數度宮内省御用品となる、大阪に 陛下御幸の初り市の献上品花籃の御用命を蒙る。その竹籃として名譽を博せるは明治卅六年第五回内閣勸業博覽會美術部に花生籃を出品し開會の劈頭に臨み斯道の鑑賞家林幸太郎氏に賣約せられ、又米國シカゴ萬國博覽會に出品して銅牌を得し等此他幾多競技場に屢々佳賞を博し、今や斯道に於ける關西の權威を以て目せられ、現に大阪美術協會幹事、大阪工藝協會等の理事及審査員の要位にあり。餘技として謠曲に通じ、茶儀に精しく、繪畫を善くし、且つ數島の和歌にも堪能である。曾て「磯の巖」といふ題にて

「波のよる磯のいはほのくほみにも宿りし月の影さやかなり」
と餘めるに見るも其風藻の見ならざるを見るに足る。其師は田中正文、石尾松泉氏等である。斯の如く適くとして可ならざるなきの天才を有し、趣味生活に没頭し、繁取目眩はしき浪速雜沓の巷にあり乍ら別に悠々たる乾坤を胸臆の裡に劃出して、その清高優美の作品の上に四周の耳目を一新せしめ、亦た自づから楽しんで老後を送りつゝある。

和田和一齋

明治十年六月生
現住兵庫縣須磨月見山

君は年十七にして竹工界の人となる、先考即ち初代和一齋翁は斯道の權威として聲名を馳す。君は先天的に優秀の手腕を有し、且つ父翁の紺槌を受けしため、夙に頭角を儔輩の上に抜く。

抑も現代竹工界の大勢は矢張り世の推移に随ひて其實質、技巧共に日に新に、又日に新に駭々乎として進んで休まざるの觀あるの一面には亦た行詰りの感もありて、今や正に一轉換の過渡期に立つてゐる。故に此の新陳代謝の過渡期を突破して一生面を開くのが竹工界の先輩にも將た青年作家にも急務である。

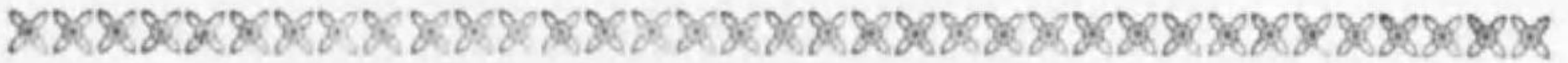


× × × × × × × ×

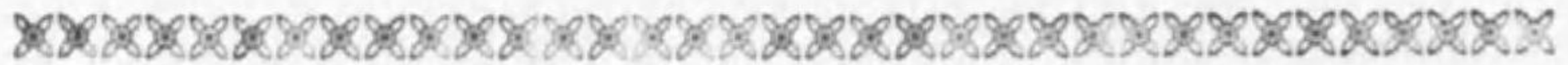
君の如きは此過渡期に立ちて多大の抱負を實現して其革命の月桂冠を上げんとするものである。元來夫の堅硬の竹が一の美術品化するまでには他の窺知しがたき興味ある半面に多

大の苦心と周到なる注意を要するのは言ふ迄もない。例之ば雪深き地方の爐邊で幾百年を経たる一個の竹を獲たりとせんか、而して之を以て如何なる籃を作り上ぐべきかを考一考せらるゝ時の境地は實に詩であり歌である。古人が池を遶りて「古池や」を口吟し、忽ち「蛙飛び

工 藝 名 鑑



工 藝 名 鑑



込む水の音」を喝破せるに一般、その構想成りて製作三昧に入り、更に仕上れる時の快感は筆紙の善く盡くし得る處ではないのである。

× × × × × × × ×

若夫れ快心の作成りて月に雪に花に、四季折り／＼の花を籃に活け、靜に之に對すれば陶然として無我の郷に入る乃ち其處に籃そのもの、眞價も生命もある。故に單に作品の多きを以て誇るに足らず、古人の精粕を嘗むるを賞しませず、凡て時代の要求に後れず、寧ろ進んで天下の先をなすの氣魄を有し、而も温健雅潤にして氣韻横生の作を以て上乘させねばならぬ。是は獨り竹藝に於てのみ云ふにあらず、書畫、彫刻、建築等凡ゆる美術は皆此處に一致して行かねばならぬ。

× × × × × × × ×

竹藝の此の如き崇高の域に至る迄には常に技巧の工夫練達のみならず、其人格の涵養が最も緊要である。何れの藝術を問はず、藝術の神に入るものは皆崇高なる人格が閃いてゐる。神品とか名品とか、尋常作品とか種々の別を生ずるのは結局その作者の人格高下の反映ではあるまいか。單に作品の巧拙によりて評購せらるる中は、其作は未だ謂ゆる人工を脱せぬので、作品の神に入るものは人工を超越して天工に入らねばならぬ。

× × × × × × × ×

以上は君の平生の持論であるが、藝術の根底は此處におかれねば到底水平線を抜くことは出来ない。此言を聞き、而る後に君の作品に對すれば其技巧の老練は云はすもがな、氣韻生動の點に於て覺へず人をして首肯せしむるに足るものがある。君の年齒僅に五十を出でしのみ、其前途の洋々たるは春海の如しと云ふべきであらう。

伊藤鐵石

明治九年七月生
出生地 愛媛縣周桑郡丹原町
現住 大阪市東成區鶴橋天王寺町五八三二ノ一

彫刻界の名匠故加納鐵哉翁の高弟で、その優秀なる藝術の天稟は夙に世の認むる所となり、師の翁亦た我後を嗣ぎ我技を傳ふるものは獨り君あるのみと稱讚止まざりし程であつた。



君の鐵筆は竹、木、金、石適くして可ならざるなしであつたが、後陶器彫刻に獨創の技を發揮して、爲に陶器を築き、巧なる彫刻を陶器に施し傳彩其他に於て亦た潤雅鑿すべきものを製出して愛好者を驚喜せしめた。ある年其等の作品を東都に展覧して岡部子、細川男、正木美校長等をして感歎せ

しめたこの事である。

遺作中の名品として見るべきものに攝政殿下御成婚奉祝のため今西林三郎氏より獻納せる「神武天皇御像」、蜂須賀

侯爵家献上の「羅浮仙」、清浦子爵家献上の「老子」、岡部子爵家献上の「多聞天」、大谷伯爵家献上の「福女」、下郷傳平氏の技藝天等は最も得意の作で、此他兵庫縣八王子本堂釋迦如來(丈七尺)、同上脇立文珠菩薩(丈五尺)、同上脇立普賢菩薩(丈五尺)、楠妣庵觀音寺本堂千手觀音、木彫觀音(高一丈四尺)、木彫白檀出山釋迦(丈一尺六寸)、紫檀椽本蠟色繪鐵筆衝立、陶製壽老、煎茶器具等構想凡ならず、技巧の妙亦他の追隨を許さぬものが多數ある。

此の如く天才的藝術の持主であり乍ら、年僅に知命にして昇逝し、猶多大の抱負を遺せば、新道の爲に惜しみても餘りある事である。君は彫刻の外に茶に通じ、又南畫を善くした。その畫筆を弄したのは十年以來の餘技と聞くも、筆致の老熟なる、布置染漬の巧妙なるは到底他の凡流の生涯を投ずるものも猶企及し能はざる程であつた。此他詩を作り俳を嗜し、詩人として亦た一種の機才が閃めいてゐた。

寂々寥々たる浪連藝壇に君を喪へるは曉の明星に離れし如き感あるも、君に後嗣あり、鐵崖君即ち其人である。亦た父君の藝術の精神と技工の妙を傳へ、年尙壯なるも、既に嶄然頭角を著はし、大阪工藝の市展に府展に常に上選して異彩を放ち、人をして疾くも第二鐵石の再生を願はしめつ、あり。逝ける君をして九泉の下に之を聞かしめば、亦方に孌然一笑するならむ歟。

【平井 汲 哉】

(一八)

平 井 汲 哉

明治十二年五月生
出生地 浪 速 城 南
現住 大阪市南區八幡筋堺筋西入

通稱新、彫刻の技を父半仙に學ぶ、流派は玉琴翁、其得意作は西曆一九二五年の巴里に於ける萬國博覽會に出品し



て銅牌を受く。

× × × × × ×

現に鳩友會長として多數の門生を指導す、資性恬淡閑雅、

恰も一茶、芭蕉の徒が鐵筆界に再生した如き人で、一言一行

みな風韻迸發し、特に其作の雅趣津々たるに至つては流石に

二天作を生涯とする浪速人士をして流涎三尺、競ふて之を求むるに見るも其一斑を窺ふに足るものがある。

田 中 主 水

出生地 大 阪 市
現住 大阪市住吉區長狭町

君の家はその昔弘佛師を以て聞え、法橋定朝以來夫の運慶、湛慶にも劣らぬ名手巨匠を出し、四天王寺の大佛師として連綿相傳へて來た名門である、君の嚴父は三十二世故立慶翁で、中興の名手であつた。



君は幼より業を家嚴に學び、明治三十四年四月京都市立美術工藝學校に入學、中途退學し、同年十月同校より賞牌を受く、同四十二年五月奈良帝室博物館に就き古彫刻を研究し其後東京、鎌倉、平泉其他各地の美術を見學し大に得る所あり

× × × × × ×

大正九年第一回聖德太子奉贊展に出品し、同品は徳川賴倫侯の買上となり、同十一年三月 皇后陛下行啓に際し、木彫

「住吉人形」を大阪府知事を経て獻上し、同年八月同市長より

木彫「技術に秀で斯道發達を資くる」の故を以し、推奨及感謝狀を贈らる、此他農展へ二回出品、昭和二年六月「聖德太子立像」八尺三寸餘の大作に成功して賞讃を博し同年正倉院拜觀を許可され、現に大阪市美術協會々員、彫刻部幹事たり、大に其前途を闊目せらる。

【田 中 主 水】

(一九)



【諏訪蘇山】

(110)

諏訪蘇山

出生地 京都市五條阪八幡前南入
現住同 上
明治二十三年五月生



夙に陶磁製作の技を其父故帝室技藝員の蘇山に學びて妙諦を得、其作品は屢皇室及宮家へ献上して嘉納せらる。

就中青瓷製作に最も秀つ、蓋し現代の陶磁界に於ける陶秀作家としては海内第一人である。

× × × × ×

人となり貞淑温厚、克く家庭を治め、又其技に精進す、而も猶大に春秋に富めば其技の更に益びえ、其作の愈光輝を放つを刮目するに足る。



【山田清次郎】

(111)

山田清次郎

出生地 京 都 市
現住 大阪市西成區粉濱東ノ町三丁目五九
明治十五年十月十一日生



に堅實、研究に熱心なるを以て稱せらる。

鐵峰ミ號す、夙に京都市立美術工藝學校を卒業、亦特に圖案を片岡北泉氏に學ぶ。其作は各種展覽會其他に出品して好評を博す。現に大阪府工藝協會、大阪圖案家協會々員たり。

× × × × ×

餘技ミして同人十數名にて多久美會を設け、毎月一回各得意の作品を交換し、互に批評を加へ其研究と娛樂ミに資しつゝあり、其門下に卒業者七名、修業中のもの八名あり、業務

【三好彌次兵衛】

(三三)

三好 彌次兵衛

出生地 大 阪
現住 大阪市西區北堀江通二丁目三十二番地
明治七年八月一日生



君は幼より祖業を継ぎ、壯年既に木工美術の堂奥に上る。而して君は斯道の第三世である、其作品は第五回内國勸

業博に二等賞を博し、又巴里萬國博に金杯を得、此他工藝協

會及諸展に屢審査員を託せらる。

× × × × × ×

現に大阪府工藝協會評議員、大阪指物同業組合副組長たり

餘技ミしては詩歌、書畫、煎抹茶、三絃、笛等多數に亘りて

造詣あり、多技多能の人である。

【高田小三郎】

(三三)



高田 小三郎

出生地 大 阪 市
現住 大阪市西成區南吉田町四五(電話天下茶屋)
明治二十七年七月十五日生

春泉、醉月、好煙性ミ號す、夙に圖案を京都の八木石泉氏に學ぶ、其作品は曾て京都鍵直商店懸賞圖案募集に應じ

て一等賞を博し、又大阪岡嶋商店同募集に一等賞、其他大阪

毛斯繪圖案大會にて銀賞を得る等幾多の名譽作を出す。

× × × × × ×

現に大阪圖案家協會幹事、大阪府工藝協會員、大阪圖案紅

友會同人、圖案いつ美會同人たり、門下に柳原春雨、八木春

謠、小出春映氏等の新人を出し、猶八名の修業生あり、懸賞なる教養を施しつ、あり、家庭亦た圓滿にして春風門に
充つるの觀あり。



【竹 村 定 雄】

(二四)

竹 村 定 雄

出生地 奈良縣磯城郡織田村大字芝
現 住 大阪市西成區北吉田町一六(電話天下茶屋)
三九六三番
明治三十一年十一月十六日生

一超庵華山ニ號す、夙に圖案の技を研究して其々奥に上り、現に大阪府工藝協會員、大阪圖案家協會員、大阪圖案紅

友會員たり。

× × × × × ×

又特に支那向輸出圖案、内地子供婦人服圖案、友染圖案其

他一般染織圖案等を一括したる「圖案研究所」を標榜して新

道の向上を計りつゝ、あり。

× × × × × ×



門下生として現に山谷華水、木村華秀、中原勝弘、南部清吾、立邊保治氏等あり、日夜その指導扶掖に努む。家庭

は夫妻の間に一子昌雄君あり、和氣瀟々たり。



笠 井 不 仙

出生地 香川縣香川郡太田村字今里
現 住 東京府下西巢鴨堀ノ内一六二
明 治 四 十 二 年 生

君は當年猶二十一歳の青年、家は代々農業を営む、君は幼より藝術の嗜好を有し、香川縣立工藝學校鑄金科に學べ

るも、四學期在學中大に稽ふる所あり、中途退學、單身東上

して鑄金家丸山不忘氏に師事して、一意研鑽に没頭す。

× × × × × ×

君の前途は實に豊富なるものなれば、百折不撓の勇だに持

續せば、その大成は刮目して待つべきものがあろう。



【笠 井 不 仙】

(二五)

【蛭川菊次郎】

(二六)

蛭川菊次郎

出生地 京都市祇園下河原町
現住 大阪市西區南吉田町六〇番地(電話天下茶屋
一二〇五番)
明治十七年十月廿八日生



芳雲と號す、初め京都の友染圖案の老大家高橋臥雲氏に圖案を、又繪畫を故菊地芳文氏に學びて一家を成す、其作は屋内外の各展覽會、共進會等に出品して入選、入賞、最も得意とする所は染織の草花模様の圖案である。

X X X X X X

現に大阪府工藝協會評議員及審査委員、大阪市美術協會評議員、大阪圖案家協會評議員、且つ長く其幹事、會計として盡力せり。其の主義とする所は古典を研究して圖案の精華を發揮するにあり、大阪府市圖案界の重鎮として仰がる。

門生として既に卒業せるもの五名、在塾修業者八名、卒業者中相當名を成せるもの少なからず、餘技として謠曲名所古蹟の跋渉を好み、忙中閑を求めて神心の修養を怠らざる所に大なる其前途を期待せらる。

【大嶋如雲】

(二七)

大嶋如雲

出生地 東 京 市
現住 東京市外濶野川町大原四五〇
安政五年二月生



通稱勝次郎、天稟の藝術的技能に依り師承なくして獨學研鑽、鑄金の技法に練達す。其作は各種博覽會、展覽會等に出品して入選、入賞、即ち金賞七回、銀賞十回、銅賞十回、外國出品二回、何れも金賞を得。現に日本美術協會特別員及顧問、東京鑄金會顧問、日本美術工藝會々員、國華俱樂部會員、又東京美術學校鑄造科教授從六位高等官五等。

X X X X X X

餘技として關州流活花師範格にして、瓢松庵關一と號す。

又謠曲をも善くす。門下生に野上龍起、加納晴雲、市岡紫雲、加納峰雲、松原如方、加瀬如山、小林如秀、吉野海雲、喜多川如泉、關如虹、佐藤如湖、柄澤壽雲、大嶋笑雲、山口吐雲、長谷川翠雲、木村一雲、金子正太郎、土師如春、小嶋金太郎、梅本龜吉、加藤如水等あり、各名を成す。此他翁は現代新道の長老として貢獻する所頗る多し。

【富 樫 光 成】

(二八)

富 樫 光 成

出生地 新潟縣村上町
現住 東京市下谷區初音町四丁目一〇四
明治十八年一月三日生

君は代々堂宮彫刻の家に生れ、幼より其技を嚴父に受けて一家を成す。就中堆朱彫刻に趣味を有して深く之を研究

し、近來特にその鎌倉彫に就きて造詣する所あり、現に帝展

二回の出品は何れも鎌倉彫にて上選の榮を博す

× × × × ×

團体としては日本工藝會、漆工會、漆藝會に屬す。又其名

譽作としては 今上陛下御成婚奉祝獻上品に堆朱彫扇面花籠



圖の彫刻を謹製して好評を博す。

家庭は夫婦琴瑟和合の間に一子あり、春風満盈の幸福を有せり。

【堂 本 五 三 良】

(二九)

堂 本 五 三 良

出生地 京 都 市
現住 京都市下京區清水四丁目

君は帝展審査員、印象氏の實兄にして、兩者共に藝術の天稟豊かにして、印象氏の日本畫に對し、君は漆藝を以て立てり。

其作品の常に舊套を脱して創作的新意の濶濶たるもの、多

き、勝た其技巧の精練されたる、多く類を見ない鮮かは手

腕の持主である。

× × × × ×

團体關係者としては、日本工藝美術會々員、京都美工院々

友たり、其作品は屢商工省展及美工院、帝展等に出して優賞

を博してゐる。



君は年齒猶壯、而して既に藝術的地歩を占むること此の如く、又その濶濶の機才は天資の人なれば、其前途の大成や想ふべしである。

山 鹿 清 華

出生地 京都市烏丸三條上
現住 京都市岡崎北御所町三十七
明治十八年三月生

通稱健吉、神阪雪住翁を師として研鑽大に努め、圖案界に嶄然頭角を現はす。曾て繪畫を第五回文展に出品して上選、次で圖案を農展第二回に二等賞、第九回商工展に同上、一九二四年巴里萬國裝飾美術工藝博覽會展に入賞、第八回帝展に特選となる。



× × × × × ×

現に京都市立美術工藝學校教授、京都美工院理事、京都圖案協會副總務、京都美術協會常任委員、京都綵工會々員、聖德太子奉讃美術展委員、日本工藝美術會常務委員、日本美術協會委員及審査委員、京都各博覽會に六回審査員を、又京都扇子團扇競技會、同刺繡組合競技會、同表具展等の審査員たり、此他京都太秦廣隆寺靈寶殿壁畫揮毫、京都府大禮獻上品「瑞鳳棚」の圖案設計及製作監督に任ずる等幾多重要地位を占む。

加 藤 雪 谷

出生地 大 阪 府
現住 大阪市東成區生野國分町七五



君は初の海軍生活をなし、又郡役所に入りて俸給生活をなせしが、由來美術に於ける優秀の天稟を有せるため、大正七年より全然美術に歿頭し、遂に今日の地位を築くに至れり。

× × × × × ×

君は鐵筆に巧に、漆器、彫刻等他に類なきものを作るを樂みし、又篆刻に特色を有してゐる。曾てナンバナ鏡を發明、且つ之を製作して時人を驚かせることあり、其作品を工藝協會及大丸美術展等に出品して賞を博せり。

兎も角も猶春秋富める人なれば、努めて休まずんば今後の大成は期して待つべきである。

【宮 川 香 山】

(三三)

宮 川 香 山

出生地 京 都 市
現住 横濱市南太田町一六三一
安 政 六 年 生

名は半之助、號は香山、有名なる初代香山の長子にして、明治二年父に随つて横濱に移住、専ら家業を援け、且つ製陶研鑽に没頭す。當時横濱は創業時代に屬して荒涼たる一寒市なりしも、他年帝都咽喉の地にして興隆の氣鬱勃たり。蓋し父翁の京都眞葛ヶ原を引揚げて此處に移れる先見の英断は少なからず京人の夢を驚かしたものであらう。



爾來其業の繁榮を來たす迄には非常な苦心と努力とが拂はれたが、外國貿易の年々隆昌に赴き、外人の往復繁きに伴ひ眞葛燒と香山氏の技量の優秀なるこゝは忽ち彼等の認むる所となり、其名聲は英、米、獨、佛其他世界的に隆然として高まり、且つ嶄新なる日本陶磁の眞價を知らしめたのはこの父子の熱誠の進りが多い。次で明治二十六年シカゴ萬國博覽會に父翁の苦心に成る花瓶を出品して歎賞を博せしが、偶米人デキン氏強いて之を求めんとし、君はボストン博物館に無償寄附を約せるため、デキンとの間に紛議を生じた。然るに君は之を所せせず鐵槌を以て其花瓶を粉碎したので却て賞賛の聲大に起る。君は其後屢歐米各地を視察し、各種博覽會等に名譽の賞牌を得しこと枚舉に遑あらず、又内地諸展には多く審鑑査員に推さる。現に日本美術協會、大日本蒸業協會、日本貿易協會等の會員として重望あり、兎も角陶磁貿易の開拓者として、又その特色を國外に發揮せる功勞者として表彰すべき元老の唯一人である。

に三男二女あり。

永 田 純 夫

出生地 徳 島 市
現住 大阪市住吉區濱口町四一四(電住吉二七五五)
明 治 二 十 年 十 一 月 生



太湖を號す、初め繪畫を竹内栖鳳に學ぶ、圖案は其獨自の研究に屬し、多年潛心練磨の結果遂に其道に一生面を開拓す。

其作品は各種展覽會、博覽會に出品して屢上選す。現に伊藤萬商店の意匠部員として久しく勤務、一面には大阪府工藝協會、大阪圖案家協會等の會員として重をなす。餘技として謠曲を楽しむ。

【永 田 純 夫】

(三三)

中 嶋 保 美

出生地 鳥 取 市
現 住 大阪市東成區東桃谷町一丁目五七四二
明 治 十 年 九 月 生

夙に金工の技を珍饈齋翁に學びて其堂に上り、更に古今東西の名器に就き専心研究して大に得る所あり、遂に一家を成す、現に大阪府工藝協會幹部員、日本工藝美術會常務委員、大阪市美術協會常任幹事、日本造幣局囑託たり。

× × × × × ×

其作は一九二五年巴里萬國裝飾美術博覽會に出品して「オルコンクール」一賞を受領し(同博覽會審査員たり)、又同年サロン、ド、オートンに額面獅子衝立を出品上選す。



陳され、同年巴里裝飾美術博物館に彫金額面を出す、而して又内地にあつては昭和二年三年に亘り帝展上選。

又同年京都大博覽に無鑑査出品、其得意作としては 大正天皇御即位を祝して大阪市より献上の銀製「菱垣廻船」の

「浪に千鳥」「蘆に鷗」の額面を出品上選す、同品は更にロンドン、のビクトリア、エンド、アルバート、ミュージヤムに出

工 藝 名 鑑

工 藝 名 鑑

大置物を、又 今上陛下御成婚を祝して大阪市献上の彫金蒔繪の御手箱の彫金の部分を、又 今上陛下の御即位を奉祝して大阪府より献上の「慶祥浪速櫓」の製作主任を命ぜられ、且つ鳳凰の部を謹製、又大阪市より同上献上の「丹鳳朝陽の大衝立」の鳳凰及裏面文字等を謹製す。次で昭和四年 今上陛下大阪御臨幸に際し大阪府より献上の「花瓶」に大阪名勝を彫刻す。

× × × × × ×

此他其製作の蹟を検すれば優品佳作枚舉に暇あらざれば茲に之を略す、其人ミなり謹嚴にして圓滿、唯藝術上の造詣を以て其生命として屹々惹らす、浪速工藝壇の重鎮として内外に重望を負へり。

× × × × × ×

其餘技ミして花を活け、茶を点じ、又併に畫に一種の天稟を吐く、多技多趣、眞個藝界の一珍ミするに足る。

其家庭は子福長者にして、順次其志途に就かれ、春風爛々ミして門に盈つるの感あり、亦た以て君の人格の反映を見るに足るのである。

【宇野仁松】

(三六)

宇野仁松

出生地 石川縣
現住 京都市五條阪
元治元年九月生

夙に京都に出で陶工の名手清風與平氏(先代)に就きて陶藝を學び、且つ本邦各窯の特色は勿論、支那古陶磁の名器を研究して蔚然一家を成す。

其作品は内地よりも寧ろ歐米の鑑賞家に歎賞さる、程多數輸出されて其名聲を博せり。

其得意とする處の青瓷各種、或は辰砂、鐵釉類の作品には獨得の創作あり、一作出づる毎に人目を驚かすものあるに兒も、其想其技の非凡なるを徴するに足る。

翁は何の團體にも屬せず、何人にも依らず、眞に獨立獨行

今日に及び、唯其業に精進するを知りて何物をも顧みず、隨つて其人となり亦た恬淡無我、頗る現代離れをしたる純眞なる藝術肌の特主にして、其老ゆると共に其技は益古雅閑逸の趣を打開しつゝ、あるは喜ぶべし。



【飯塚環珩】

(三七)

飯塚環珩

出生地 栃木縣下都賀郡栃木町
現住 東京市下谷區上根岸町八八
明治二十三年三月十五日生

名は支石、幼より竹藝を父に受け、更に獨得の工夫研究を積み、遂に蔚然一家を成す。

快心の作としては 大正天皇御即位當時の御下命品、又昭和の御大典御奉行に際して 皇太后陛下へ奉獻の花器、此他各種博覽會、展覽會に金銀賞を獲ること幾回なるを知らず、特に大正博覽會出品は 聖上陛下御買上の光榮に浴す。

現に日本美術協會審査員、東京府商工獎勵會審査員、日本



工藝會委員等の重要地位にあり、又別に木竹工藝會を創立して其牛耳を執る。餘技として繪畫、生花に趣味を有す。門下生二名あり、各師匠に精進せり。家庭は子女四名、平和堅實を以て稱せらる。

X X X X X

【嶋 野 三 秋】

嶋 野 三 秋

出生地 金 澤 市
現 住 大 阪 市 住 吉 區 北 田 邊 町 文 の 里 三 九 七
明 治 十 年 七 月 二 十 二 日 生

君は夙に北陸藝術の淵藪たる金澤市に於ける名匠嶋田松齋氏、又岸浪柳溪氏等に就き漆藝及繪畫を學び、更に古今の名品にヒントを得て一家を成す。

× × × × ×

其作は市俄古萬國博、巴里萬國裝飾美術博等に出品し入賞す、又其得意作としては大阪府及同市より、今上陛下御大典を奉祝して献上せる綜合合作中に蒔繪の部を擔當し好評を博す

現に大阪工藝協會評議員、日本工藝美術會委員、大阪市美



術協會幹事等たり。君は漆藝の名手たるに共に又詩人として一境地を拓く、其作る所の和歌、その揮灑する所の書風共に雅韻津々、亦浪華詞壇の珍とする所たり。

門下に武石秋理其他新人多し、又頃日温良なる後繼者を得、家庭は女子四人、亦清福に富めるの人なり。

君は太子展に無鑑査推舉となり、又門人武石山石は第一回太子展に上選す。

(三八)

太 田 春 影

出生地 東 京 市
現 住 東 京 市 下 谷 區 谷 中 眞 嶋 町 一
明 治 二 十 二 年 二 月 十 一 日 生

春景又別に蘭坡堂と號す、初の彫金の技を船越春珉に學び、更に幾多の工夫を古今の名品に就き研究して一家を成す。

× × × × ×

其作品は農展、商工展其他各種展覧に出品して上選し、金賞一、銀賞四、銅賞十餘、太子奉賀展二回共佳作を出す。

現に彫金會員、水産工藝會員、金工會同人、金影會々長たり。門下生としては梅垣景山、野口景國、吉住景雲、吉村景



心、榎本景美、安田景豊、岡田景有諸氏あり、何れも獨立して向上精進を續けつゝあり。

家庭は男三人、女一人、門生八人、團樂和諧春風習々として一堂に滿つ。

【太 田 春 影】

(三九)

【伊 東 陶 山】

(四〇)

伊 東 陶 山

出生地 滋 賀 縣
現 住 京 都 市 白 川 筋 三 條 南
明 治 四 年 生

君は滋賀縣士族にして名門に生れ、後京都陶藝の名家伊東家を繼ぐ、陶藝を先代の岳父に學びて其堂に上り、又南

宗の技法を内海吉堂に受く、人となり温厚篤實にして氣品高く、陶界稀に見る人格者である。

× × × × × × ×

其作品は各種博覽會、展覽會に出品して優賞を受くること幾十回、又屢長き邊りの御用命を奉じて佳作を出す。現に帝展第四部無審査の優待を受く。最も粟田焼に妙を得、令嗣



翠臺氏亦た父翁に似て優秀なる技術に富み、父子相待つて榮光其門に輝くの概あり。

餘技ミして漢詩にも造詣あり、恰も古譽米其人に彷彿たるの傳あるは蓋し其人格の反映ならむか。

【迎 田 秋 悅】

(四一)

迎 田 秋 悅

出生地 舊 彦 根 藩 士
現 住 兵 庫 縣 下 西 垂 水 字 川 西
明 治 十 四 年 一 月 生

秋悅は其號、通稱嘉一郎、嘉兵衛翁を父ミす、幼より工藝を好み、稍長じて繪畫を京都美術學校の三宅吳院翁に、茶道を京都釜座の堀内宗匠に、俳句は子規派に私淑す

第五回内國勸業大博覽會には敦盛の圖の蒔繪手筈を出品して大に認められ、又故淺井忠氏の指導を受けて松林古香等ミ計り京漆園を起し、淺井氏逝去ミ共に同園を去る。

× × × × × × ×

大正十年赤塚自得、植松包美二氏ミ協同して蒔繪展覽會を東都に開く、時人稱して蒔繪三作會といふ

を計る、大正十五年第一回聖德太子奉贊會美術展覽會代表委員ミして 久邇宮殿下御陪食を賜はる。

大正十五年秋日本美術工藝會委員ミなり、昭和二年帝展第四部に上選、此他各種展、博覽會等に優賞を得しこと數ふるに暇あらず、以上の行運に徴するも、君が京阪工藝界の重鎮ミして其技倆の非凡なるを知るに足らむ。



齋藤富ト

出生地 東京市
現住 東京市本郷區駒込林町一六五
明治三年八月廿日生

君は初め平井倉吉氏に就き指物の技を學び、次で明治二十三年東京美術學校長岡倉覺三氏より各種工藝品製作の爲に聘せられ、在校中今泉雄作氏より美術上の基礎知識を、又帝室技藝員石川光明氏より指物に就ての秘奥を授けられ



爾來刻苦精勵遂に斯道の一明星として輝くに至る。

今その快心の作及略歴を概叙すれば

- 一、明治廿四年一月宮内省より東京美術學校に製作依頼の「市俄古博覽會出品の鳳凰殿」内部の家具製作をなす。
- 二、明治廿六年四月東京高等工業學校木工科教員を命ぜらる
- 三、明治卅七年東京美術學校より米國セントルイス萬國博覽會出品の書棚(桐材)製作を同校より命ぜらる。

四、明治卅八年一月高橋是清翁より帝室技藝員故竹内久一氏に囑せられたる 明治大帝御尊像の御帳臺(六尺四方)の製作を竹内氏より依頼され、之を製作す。此御尊像は御帳に納められ高橋氏より昭和三年二月 聖上へ献上され、現に御物となる。

工藝名鑑

工藝名鑑

五、明治四十年七月宮内省献上のため華族會館より東京美術學校に依頼の書棚(桑材)を製作す。

六、明治四十五年四月東京彫工會第九部指物部副部长に擧げらる。

七、大正六年十一月宮内省献上のため華族會館より東京美術學校に依頼の書棚(桑材)を製作す。

八、大正十一年四月 英國皇太子殿下へ献上の爲東京府より東京美術學校に依頼の本邦名勝繪畫帖宮及外箱を製作

九、大正十二年十二月文武官一同より 皇太子殿下御成婚奉祝献上品御飾棚素地、二曲屏風素地の製作を同十三年

一月東京美術學校より命ぜらる。

一〇、大正十四年八月文武官一同より 大正天皇御銀婚式奉祝献上品御飾棚素地の製作を東京美術學校より命ぜらる

一一、大正十一年、同十四年、昭和三年奈良正倉院拜觀を許さる。

此他各展等に出品佳賞に上れる諸作中の主なるものには明治四十六年指物研究會に天平式手宮を以て二等賞を受領す

昭和三年七月京都市長土岐氏の依頼に依り大禮記念京都大博覽會工藝館に一位木香爐卓を出品す。

X X X X X

其主義として純眞の指物を主とし、一切の裝飾を加へず、自然的美を發揮するにあり、現に日本美術協會審査員、聖德太子奉贊會第一回、第二回の工藝部委員たり。

餘技として茶花ミに造詣あり。門下生として既に業を成せるもの五名、其他外國人では佛人コースロップあり(大正四年入門、牛込區市ヶ谷谷町一二〇番徳川邸の隣に住居)

【河村 靖山】

(四四)

河村 靖山

出生地 京 都 市
現 住 京都府下深草町福稻小字開土九二
明治廿三年八月一日生

通稱半次郎、夙に京都陶磁器試験所を卒業し、又深く古今の陶磁に就き研究して堂々一家を成す。



其作は幾多官私展に譽譽を博せるが、就中帝展第八回に上選、第九回には一躍推薦されて其技倆の凡ならざるを裏書きする。又快心の作としては昭和三年秋、官中御用品として謹製の「白瓷葡萄紋花瓶」の如き其一にして、此他枚舉に遑あらず

× × × × × ×

其主義する所は陶磁器の健全なる發達を期し、又製作さ

しては古器の特長を研鑽し、之を現代生活に即せしむるにあり。

餘技として繪畫に興味を有し、門下には蒼玄社同人あり、公私共に新道に工献する所少なからず、盡今後に於ける陶磁界の樞機把握の代表として最も注目さる、一人たり、家庭は夫妻の外に三人の愛兒あり春光燦として一門に輝けり

【清 風 與 平】

(四五)

清 風 與 平

出生地 京都市東山通五條橋東五丁目四五八
現 住 同 上
明治四年八月一日生



成山ミ號す、製陶の技は之を帝室技藝員たりし故三代目清風與平に、繪畫を田能村小齋(直入息)に學びて大に熟す其快心作としては一九二二年日佛交換展に黄砂磁花瓶を出品、又大正四年桑港博覽會に出品して金賞を、同六年日本美術協會展にて二等賞を、同八年農商務省展に二等賞主席を博し、同十三年佛國ナショナル、デ、サロン、アツソシエスに推薦せらる。

以上の出品諸作に見るも君の技倆の如何に優越なるかをトするに足る。乃ち知る父祖傳來の陶藝に加ふるに多年研磨工夫の君の獨創の妙技が調節されて其處に大なる光輝が見らる。順序よりすれば現今の官展等には當然高級の地位に立つべき資格の持主ながら、時流に走らず昂然獨歩の處に何處迄も其風懐が伺はる。

其家庭は二男一女あり、春風常に滿庭に動くの感がある。

【香 取 秀 眞】

(四六)

香 取 秀 眞

出生地 千葉縣印旛沼畔
現 住 東京市外濠野川町田端四三八
明治七年一月元旦生

現代鑄金界の重鎮にして東京美術學校鑄金本科を卒業、又夙に岡崎雪聲、大島如雲、杉浦行宗の諸老に就きて研究し、蔚然一家を成す。



其作を農展、商工展の如き官展に二等優賞を受くること三回、其他一般博覽會、展覽會にては多く審査の地位に立つ帝展第四部開始第一回より審査員たり、其得意の技は獅子又は鳳凰及其裝飾等にあり、高雅優秀他の容易に企及し難きものを有す。

現に日本美術協會、東京鑄金會、國華俱樂部、工藝濟々會時好會、六和會等の樞要地位にあり。

治するには一に日本精神の發露に力めて、其人の思想人格共に其作品を通じて躍如として他の心胸に透徹せしめざれば休まざるの概あり、是れその一代の巨匠として尊敬せらる、所以ではないか、君の先輩として隠れたる老匠なきにあらざるも、現代の視聽を一身に集め且つ現代の新界を提擧するの地にある第一人者として君を推すに憚らず。餘技として國歌及書を善くし、各其堂に上る。門生多數又其後嗣に秀才あり、蓋最も天恵に浴せるの人なり。

【稻 葉 七 穂】

(四七)

稻 葉 七 穂

出生地 京都市三條通白川橋西入、今小路町
現 住 同 上
明治十八年九月生

君は夙に七寶の技術を研究して其堂に上り、展佳作を出して各博覽會、展覽會等に上選佳賞を博す、會て歐米を漫遊すること三回、審に諸外國の嗜好、傾向等を研究して我七寶藝術の革新を計る。由來京都に陶磁を以て立つもの其人屈指に暇あらざるも、七寶に至つては眞に寧々晨星の如しである。

且つ七寶は海外輸出品として重をなし、我國産奨励上忽にすべからざるものなるも、他の陶磁の如く普遍性を有せざるため、隨つて新業に従事するもの少なきに、君は奮つて之が振興を計り、其製品の海外突破を企てし如き、邦家の爲に最も禮賛すべきものであらねばならぬ。

特に況や舊慣を固守し、舊型に甘んずるもの多き舊都にありて、君の敢然として三たび海外視察を續けし如きは隨に他の項門の一針として尊敬を拂ふべきである。

【河井寛次郎】

(四八)

河井寛次郎

出生地 島根縣能義郡安來町
現住 京都市東山區五條阪八幡前南入
明治二十三年八月生

君は新興工藝美術界の驍將で、夙に東京高等工藝を出で、深く陶磁の逕路を究め、其天來の特色を捉ふるこゝに腐心し、遂に窯を京都東山に築き、其一作は一作よりも精練を加へて自然味を發揮し、京洛傳統の陶藝家に驚異の眼を睥するに至る。特に君が日本の各郷土に有する古來の特色ある陶磁研究に着目し、之を自窯の中に取入れ、謂ゆる寛次郎式の新藝術の産出に至つては何人も歎賞措かざる所である。

特に況や其人となり剛健素朴で、善く君の作品其もの一致し、如何なる小品の上にも其人の師の俾ばれる處に君の貴さが閃めいてゐる。

夫のアドケなく罪のない安來節の本場産湯を使った君である、君の作品に對すれば亦た聲なき所の安來節を掌中に丸め込んで撫する如な感がある。此に至つて君の藝術は天籟の形の上に賦せられたものと想はる。

君は其家にあれば多くは筒袖姿で土に親しんでゐる。而して聲聞を求めず、榮達を願はず、種々な團體にも餘り顔を出さず、微頭微尾、高蹈的獨自の實境に安んじて、藝術是れ命とするの人である。

X X X X X X X

X X X X X X X

新井 謹 也

出生地 三重縣鳥羽
現住 京都市今熊野日吉町一三三
明治十七年七月生

君は字鮮三號す、當初洋畫界の肴宿淺井忠氏に就きて研究し、大に其材幹を認められ、新界の一明星として輝いて



ゐるが、大正九年より陶藝の研究に没頭し、遂に京都に窯を築き、多年研鑽練磨の藝術的伎倆を陶藝の上に發揮し、君の窯より出づる幾多の作品は何れも新味躍如として他の舊習古法にのみ拘束さるゝの徒をして目を瞠てしむるに至つた、蓋新界の痛快事にして、京都陶界の新材たる河井寛二郎、川合卯之助氏等と共に新機運打出の銳鋒として長敬されてゐる。

X X X X X X X

其作品は商工展、國展、帝展等に出品して屢上選入賞、現に日本工藝美術會員、關西美術會員等として重をなす。家庭に二女二男あり、又門生二あり、素朴健實を以て稱せらる。

【新井謹也】

(四九)

【皆川月華、大串長春】

(五〇)

皆川 月 華

出生地 京 都 市
現住 京都市上京區吉田下阿達町二一ノ二
明治二十五年生

通稱秀一、初め繪畫を都路華香に學び、後染織圖案を獨習すること十數年、遂に今日の境地を拓けり、其作は各博覽會、展覽會等に出品して屢優賞を博す。現に帝展第四部にも出品上選して多年努力精進の痕を示した。君は年齒猶三十六歳といへば今後の造詣ニ大成は刮目して之を待つに足る。

大 串 長 春

出生地 佐賀縣有田町
現住 京都市今熊野南日吉町
明治十九年八月生

通稱喜代次、夙に東京美術學校日本畫科を卒業せる新材にして、陶藝に没頭し遂に一家を成す。其作は各種展覽會等に出品して屢佳賞を博す。
由來君は陶器の本場たる有田に生れ、更に美術學校に筆の藝術を究め、一轉して洛陽の陶界に入り、一種獨特の研究を積みつゝあるこゝにて、其作品の特色あるは言を待たざる所、況や前途春秋に富む、其大成や期して待つべしである。

森 野 嘉 光

出生地 京 都 市
現住 京都市五條阪八幡前南入
明治三十二年四月生



通稱嘉一郎、京都美術工藝學校及同繪畫專門學校出身にして、夙に日本畫及工藝を研究し、其作品は帝展の日本畫部及工藝部に上選す。作風は徒に古型に捉はれず、極めて嶄新なる意匠と技法に依りて一機軸を打出す。

現に日本工藝美術會々員として前途大に嚆望されたる新進作家の一人者である。

人となり温健着實、善く其藝風ニ一致して、滋味津々たるものがある。

【森 野 嘉 光】

(五一)

【佐藤美崇】

(五二)

佐藤 美 崇

出生地 静岡縣周智郡久努西村
現 住 東京市本郷區八重垣町六十五
明治十八年十一月生

通稱省吾、夙に東京美術學校に業を卒え、且つ海野美盛氏に學びて其蘊奥を敲く、其主義する所は一般の金屬品を美術化して製作改善するにあり。而して此意義を實現すべく工場を經營し、着々實績を擧げてゐる。

是を以て會場藝術に虚名を賣るを避け、各展覽會等には努めて出品せざるも、猶前後十數回に亘りて上選受賞、或は御買上等の光榮を有してゐる。



此他自己經營の工場に於ける生産力は未だ多量に上らざるも、常に優秀品を出し、特殊の技能を示してゐる。故に屢省内省、内務省等の下命製作をなす。現に本年製作の伊勢大廟に納めらる、神寶御劍の御拵の如きを併せて既に百振に垂ん

みする數に上れるを見ても、亦た氏が技能の凡ならざるを知るに足るであらう。

現に日本美術協會其他五團體の幹部員、或は會員として重視されてゐる。又門下に教を乞ふもの二十有餘名に上り氏の新界に於ける地盤は牢平として動かす可からざるものがある。

【楠部彌一】

(五三)

楠 部 彌 一

出生地 京 都 市
現 住 京都市三條通白川橋東入
明治三十年九月生

君は夙に京都陶磁器試験所に業を卒えて嶄新なる研究を遂げ、且つ京都に於ける新界の各傳統を摺みて、其處に自個の新生命を植付けつ、あり。

現に日本工藝美術會委員として重要な地を占め、又其作品は帝展に上選して 聖上御買上の光榮に浴し、又巴里工藝博に出品して受賞、其他各展にて上選受賞等枚舉に暇あらず、

其主義する所は時代に適應する正しき工藝の建設にあり

而して氏の其主義は歴々として其作品の上に躍動しつ、他の京都新進諸作家と相待つて陶磁界に於ける古き苔を洗ひ落して、一道の新光明を放たんとする所に氏の眞價が認めらる。

家庭は夫婦琴瑟相和するが中に一女あり、亦た春光萬斛の中に恵まれたる一人である。



【淺見五郎助】

(五四)

淺見五郎助

出生地 京 都 市
現 住 京都市東山區五條橋東四丁目
明治二十八年七月生

君は純平たる京都ツ兒で、特に陶磁の淵叢たる東山五條に住し、幼より陶磁製作の教訓を受け、且つ廣く内外古今

の名作に就きて研究し、遂に一家を成す。

× × × × × ×

現に日本工藝美術會、昭和工藝協會、時習園等の各委員として盡瘁し、且つ大に其人となり認めらる。

× × × × × ×

其作は帝展第八回、第九回に出品して連續上選、其他商工

展第十三回には三等賞の佳選に上る、又各展に上選受賞すること枚擧するに暇あらず。其得意作としては「梨果釉青

斑点花瓶」がある。

家庭は二男一女あり、圓滿に純真を以て稱せらる。



でもなし。

【淺井清豊】

(五五)

淺井清豊

出生地 京都市日本橋區檜物町二十二番地
現 住 京都市東山區今熊野實藏町七十番地
明治十六年一月生

君は通稱豊作、如水庵清豊と號す、夙に東京府下大崎町の加藤友太郎氏に就き其技を修めて堂に上り、其作品は各

種博覽會等に出品して上選、或は佳賞を得しこと屈指に暇あらず、人となり亦た温厚篤敬にして他の推服する所なる。

× × × × × ×

現に洛葉會員及一陶會員、又陶趣會主として氣を吐いてゐる。君は京陶界に於ける堅實なる作家の一人にして不斷の努力を續けてゐる。

鬼も角も江戸ツ兒的氣分に、京都の優雅なる情味を加味して其技を精練し來りたれば、其作品の面白きこと云ふま



伊 東 翠 壺

出生地 京 都 市
現 住 京 都 市 東 山 區 白 川 筋 三 條 南
明 治 二 十 七 年 十 月 生

君は京都陶磁器試験所出身にて、祖父の帝室技藝員伊東陶山及父陶山の兩翁に就き傳統的の鍛錬に加ふるに、新しき研究を以てし、優に一家を成す。



現に京都美工院同人、日本工藝美術會、帝國工藝會、清修會等の會員として光彩を放つてゐる。其作は商工展、日本美術協會展、巴里裝飾美術工藝博等に出品して上選、其主義とする所は現代生活を基調としたる新しき工藝品を作り上げるにあり。

君の前途は洋々として春海の如く、且つ其居は陶藝の驛北にも云ふべき京都にして、家翁は斯道の耆宿たり、近き將來に必ずや人目を敬てしむる快心の作あるを何人も期待する所である。家庭は夫妻間に一男あり、質實堅確を以て推さる。

山 崎 光 洋

出生地 石川縣能美郡久常村字秋常
現 住 京 都 市 東 山 區 七 條 下 美 術 學 校 前
明 治 二 十 三 年 五 月 生

君の學歷として先づ舉ぐべきは始め京都陶磁試験所に次で大阪高等工業學校に、又更に京都陶磁試験場長藤江氏等に就て研究を重ね、遂に今日の練達を見るに至つたのである

X X X X X



此他別に繪畫を山元春學氏に學んだ、快心の作では往年米國で開かれた萬國博へ日本側代表として花瓶を出品し最高賞を博した。此他戰勝博繪畫に上選、岐阜縣御大典記念繪畫展にて受賞、第七回日本産業博に入賞、大正九年第一回京都陶磁指定作者競技會に一等賞を得、大正十年に同賞を重獲し、

此他商工展等に褒賞を受くること數十回、又其作品は竹田宮家及久邇宮家御買上となる。君は其作品中にて辰沙袖の使用に獨得の境地を拓いてゐる。人となり温厚篤實の君子人で、命名其作品と共に知己の間に高し。

眞 清 水 藏 六

出生地 京都市五條橋東四落町(今の橋東六丁目)
現住 京都府宇治郡山科町大字西野山小字岩ヶ谷
文久元年五月十二日生

雅號は泥藏、庵號は泥中庵、父は有名な藏六翁で、代々名陶を以て聞ゆ、而して翁は幼より其技を父に受け、且つ

古今の名陶を研究して獨自の境を開拓した。

X X X X X



に我をも世をも遺れてゐる處に翁の人格が閃いてゐる。是故に他の何の團體にも没交渉で、眞に獨立獨歩の境に立つものを君とする。餘技として文人畫を善くする、飄逸洒脱にして是亦た遺憾なく其人を語つてゐる、宛然たる古壘米其人を見る如な感がある。目下二人の門生あり何れも師風を敬慕して其藝術に精進してゐる。

其得意作は簡素なる花瓶、茶器等にあり、その閑逸の韻致に至つては他の容易に企及す可からざるものがある。云ふ迄もなく、謂ゆる陶磁の各種各樣適くとして可ならざるなきの巨腕を有するも、出で、俗間に售るの陋を厭ひ、夙に洛外山科に隱栖して窯を築き、靜に風月を楽しみつ、且つ土の妙技

河 内 宗 明

出生地 東京市神田區連雀町一八
現住 東京市本郷區千駄木町二四五
明治二十年十二月生

通稱介三郎、別に閑雅權、又は芳耕齋と號す、夙に金工の技を故帝室技藝員平田宗幸氏に學んで出藍の稱あり、其快心の作としては



- 一、巴里萬國博出品受賞
- 一、米國費府萬國博出品名譽大賞を受く
- 一、皇室御屏風金具一雙(但四分一製)
- 一、久邇宮殿下御買上、銀打出壺
- 一、法相原嘉道氏へ納入の盛花器及花生

此他内外博、展覽會等へ出品受賞多數、現に鍍金協會、大日本水産工藝協會、日本工藝美術會、工藝作家會、日本美術協會、工藝協會、在家佛教修業團等の會員或は幹部員として公私共に努力を拂ひつゝあり、主義は自由作を標榜す。帝展第四部へは當初より連續上選、門下生十數名の中、卒業生丸山角之助氏は目下東京府立工藝學校金工科助手たり、田中榮藏氏は秋田縣廳工業試作所技師たり、根田雄之助氏は秋田縣廳工業試作所技師たり、茅野良平氏以下數名は自家にあり研究中、趣味は極めて多方面に亘り其人亦た圓満和厚を以て稱せらる。

川口浮舟

出生地 京都市
現住 京都市外山科東野
明治廿二年四月二日生

通稱幸太郎、初め模型の技を京都の博物模型師野村捨次郎氏に學び、其秘訣を受くるこゝ三年にして堂に上り、更に獨力人形製作の技に心を潜めて精進し、遂に一家を成す。

君は會場藝術として名を傳るを厭ひ、常に獨自獨行の境にある、僅に光美會の同人、巴會の幹事に其名を連ぬるに過ぎず、其得意作としては

▼明治四十二年秋臺灣總督府より日英博出品に際して「生瀨人」等身大六体製作

▼大正元年十一月「桃山人形」創作命名

▼大正三年三月大正博へ朝鮮總督府「朝鮮風俗人形」出品に



際し冠婚葬祭六体等身大製作

▼同年同月大森京都府知事より竹田宮妃殿下へ創作「圓彌滿」献上

▼大正四年六月廿五日地久節當日 皇后陛下へ「御所人形萬歳」三体壹組板屏風臺附極彩色献上御嘉納の光榮に浴す

工 藝 名 鑑



工 藝 名 鑑



▼大正四年十一月三日 大正天皇御即位大禮の節大阪今橋集英校へ「高御座」十分一模型納入

▼大正五年五月東京三越に於て個人展開催社會の具眼者に認めらる

▼大正五年十一月三日一尺一寸の「猩々能人形」 聖上陛下立太子禮御舉行當日献上御嘉納の光榮に浴す

▼大正六年以來大阪三越に於て個人展年々開催、毎回好成績

▼大正九年三越光美會組織の節同人として舉げられ毎開催の節成績最優良

▼此間大公使の手を経て外國元首賞給に作品數多く知らる

▼大正十一年三月福岡松葉屋にて個人展開催、努力の大作全部賣約せらる

▼大正十二年三月大阪高麗橋春海商店にて個人展開催、力作品多數賣約

▼大正十五年十二月十四日「山科人形」創作す

▼昭和三年十月廿三日 秩父宮御成婚御報告の爲御入洛の砌り「天平式神像懸」壹對木彫献上御嘉納の光榮に浴す

▼昭和三年十一月京都御所に於て 聖上陛下大禮の砌り木彫「御所人形萬歳」壹組天覽の榮を賜ふ

抑君の最も得意とする所は「萬歳御所人形」「於多福」等なり、君は天來の藝術肌の人にて毫も世に媚びず、先輩、名流に出入せず、超然自個を宗とし大自然を師として知己を百年の後に求むるの概あり。餘技として和歌、俳句、遊畫に堪能である、蓋し亦た異彩多き藝術家の一人者である。

【伊藤正見】

(六一)

伊藤 正見

出生地 埼玉縣川越市
現住 東京市本郷區根津片町二四
明治十四年八月九日生



君は夙に其技を東都の兼康正壽氏に學んで彫金の堂に上る、其作品は帝展第四部に上選、又美術協會にて銀賞、日

英博に(花瓶)金賞、平和博に(三生菓地板)金賞、彫工會(船
辨慶)に金賞等各展に佳賞を博せしこみ枚舉に暇あらず。

現に日本美術協會、工藝美術會、彫金會、金工會、水産會
等の委員又審査員として公私の爲に努力を捧けてゐる、堅實
平和の人格者にて、其作品の専ら温健精緻なるに之を見るも

其人となりが首肯かる。

X X X X X

餘技として俳諧に趣味を有し、時として人の心核を打つ如き佳作が唇邊より迸出する、門下に其業を卒へしもの五
又在學して研究に邁進中のもの二あり、家庭は南薰温を解くの境にありき。

和田 桐山

出生地 尼崎 市
現住 尼崎市寺町五百二十番地
明治二十年一月九日生



通稱正兄、桐山は雅號にして陶磁を翁草園、窯名を琴浦窯と稱す、君の嚴父は曾て郡長たり、又兵庫縣教育課に奉
職され、視學等となられしが、非常な愛陶家にして、明治三十四年遂に官を辭して陶窯を築き、美術的陶器製作に没
頭し、他面には子弟の工藝教育に盡瘁された、而して明治三十九年より尼崎市助役となり同四十五年に卒去さる。

君は此の如き特質を其父に襲け、幼より製陶の技を研究し
一定の師承なくして各種各様の技法を實際に就き習熟し遂に
一家を成す、其作品は

- 一、大正六年 故伏見宮貞愛親王藤田彦三郎氏邸に台臨の
際御染筆の御前樂燒をなす
- 一、大正十三年故近衛光登尼公同氏工場へ台臨、親しく製
作状況の御覽を賜り且つ氏の作品に筆を染めさせらる
- 一、昭和三年 故久邇元帥宮、同妃兩殿下の法隆寺御台臨
の初その御前に於て御染筆の即席樂燒をなす

一、昭和四年六月 聖上陛下關西行幸に際し其謹製の花瓶二個を神戸に於て天覽に供へ奉る

以上は君としての光榮の一斑を挙げたのであるが、君の作品は大阪府市の工藝展にて屢佳賞を博し、現に大阪府工
藝協會員、大阪市美術協會評議員として獨歩の地位を占め、其前途頗る洋々たるものがある。

趣味として俳句を善くす、君の居は恰も阪神兩郡の中間に介在するを以て、陶趣味の紳董常に座上に滿ち、君の圓
満の人格と相待つて令名噴々たり。

【和田 桐山】

(六一)

【海野清】

(六四)

海野清

出生地 東京市
現住 東京市本郷區駒込町三二七
明治十七年十一月八日生

君は有名なる明治時代の彫金大家故帝室技藝員海野勝珉翁の四男にして、夙に東京美術學校金工彫金科を卒業、且

つ深く家翁の薫陶を受けて一家を成す。

X X X X X

其作は幾多の内外官私展に出品して佳賞を得しが、最近開

設の帝展第四部第九回に特選の光榮を荷ふ。

現に日本美術協會審査員、國際美術協會審査員、聖徳太子

奉賛會評議員、東京府美術館常議員、農工商工藝審査委員會



委員、東京美術學校助教、金工科理事等の要位にある。

其所屬団体は日本美術協會、日本鑄金協會、工藝濟々會、國際美術協會、工藝美術會等あり、其前途洋々として海

の如きものあり。

黒田宗傳

出生地 京都市上京區室町今出川下北小路室町
現住 京都市中京區押小路富小路東入橋町
明治四年九月二十日生

君は通稱傳次郎、其家は有名なる竹工の名家にして連綿既に十一代を重ね、家業愈榮え、技益精に入る、而して君

は幼より其業を黒田家十代にあたる、嚴父正玄翁に受けて其

妙諦に悟入し、明治三十二年二月現住地に分家す、君は實に

正玄翁の二男なり、其得意作品は左の如く出品して光榮を荷

へり。

一、米國セントルイス萬國博に銅牌受領

一、全國勸業博に宮内省の御買上ミなる

一、全國竹製品共進會に金盃受領



一、御大典御駐叢中天覽品御買上となる

目下京都市藝協會、京都竹器組合協竹會、京都美好會等の諸團體に屬して樞要の地に立てり。

既に二人の門下を有し、家庭は令閨ミの間に七人の子女あり、和氣藹々、その業務の繁榮と共に令閨漸く高し。

【黒田宗傳】

(六五)

【北原千祿】

(六六)

北原千祿

出生地 高松市旅籠町
現住 東京市巢鴨上駒込三九〇
明治二十年五月生



千鹿ミ號す、夙に東京美術学校を卒業す、其作品の得意なりしもの一二點を擧ぐれば、往年の東京平和博に出品して一躍銀賞を博し、又帝展に工藝部の創設せらるゝや二回特選、三回目には推薦された、亦以て其技の優秀にして遠く群を抜けるものあるを徴するに足る。

× × × × × ×

日本美術協會、濟々會、无型、工人社等に屬し、現に日本

工藝委員、日本美術協會委員の要地にあり。

餘技ミして大弓、將基を好み、門生六名を擁し、猶花々ミして其業に精勵しつゝ、あれば、今後の造詣ミ其大成ミは期して待つべく、況や其前途の洋々たる、天は益斯人に幸するものミ謂ふべし。

【渡邊萬里】

(六七)

渡邊萬里

出生地 千葉縣長生郡太東村和泉
現住 東京府下瀨野川町田端二八七番
明治六年九月三日生



夙に其技を平田宗幸氏に學びて堂奥に上り、更に古今の名品に就いて刻苦研究して一家を成す。

× × × × × ×

其作品は

- 一、佛國萬國工藝博に名譽賞
- 一、内國各種博覽會、展覽會に屢銀賞、銅賞を得
- 一、帝展第四部に開設以來連續上選

× × × × × ×

現に日本工藝美術會、日本美術協會、帝國工藝會、其他幾多の團體に参加して重視せられ、且つ其委員等に擧げられ、公共的にも努力を拂ひ、又自家の製造の上にも向上發展の一路を直進せり。
又、目下十四の門下生を有して其蒸陶に任じつゝ、あり。

【山 田 樂 全】

山 田 樂 全

出生地 京 都 市
現 住 京 都 府 山 科 町 厨 子 奥、吉 尾 園
明 治 七 年 六 月 生

(六八)

通稱覺治郎、夙に漆藝研究に没頭して一家を成す。氏は常師なし、或は古今の名器に就き、或は現代の趨向に察して大に得る所あり、屢快心の作を出して斯道諸家の推服する所なる。



現に京都美工院同人、日本工藝美術會員、日本漆工會、京都六趣園、京都美術協會等の會員、或は其幹部として幹旋する所少なからず。又帝展第四部の開設せらる、や其作を出品して上選、其他昨年京都市よりの皇室献上品の合作に、或は宮内省御買上等の光榮に浴す。
鬼も角も關西漆藝界に於ける最も堅實にして老健なる作家の一人者たり、且つ將來斯道の重鎮として期待せらる、人格の持主である。

其得意とする所の乾漆の使用、意匠の精緻なる如き、最も氏の性命を托せらる、ものにて、世の徒らに風潮を逐ひ場當りを事とする作家等の企て及ばざる所のものである。家庭圓滿、業餘若を煮、風月に親しむを樂しみ、亦た樞門富貴の門を敲かず、唯漆藝三昧に悠々自適する所に古名匠の面目を偲ばる、なり。

松 本 勝 次

出生地 佐 賀 縣 有 田 町
現 住 同 上
明 治 二 十 八 年 九 月 十 一 日 生



君は勝竹、又は紫山と號す、夙に佐賀縣立有田工業學校を卒業し、又陶技を父米助翁(肥前陶工五代平右衛門)に受け、更に岳父年木庵、深海宗竹翁の遺法を學び、加之ならず大正八年中支那各地を遊歴して仔細に古名陶を研究し、爾來深く古今の名陶珍器に心を潜めて研鑽工夫し、進んで一新機軸を出すべく努力を積みつ、あり。

其結晶の一として、昭和三年磁器本燒にて釉上上繪法を發明して專賣特許權を得る、こゝ二件に及べり、君の得意作は大

型器物、花瓶、火鉢、大井、大鉢等にあり、其作は屢商工展其他に出品して聲譽を博す。

餘技として日本畫を藤井紫水氏に學ぶ、其畫は温雅清健の評あり、家庭は圓滿を以て稱せらる。

【松 本 勝 次】

(六九)

【香 取 正 彦】

香 取 正 彦

出生地 東 京 市
現 住 東 京 市 外 濠 野 川 町 田 端 四 三 八
明 治 卅 二 年 一 月 十 五 日 生

(七〇)



君は初め太平洋畫會研究所に就き、大正四年より同九年まで中村不折、岡精一氏に洋畫を學び、更に東京美術學校鑄金科に入り、同十四年卒業、其間村越三千森、信田不洋氏等と光爐會を創立せり、其作品は

- 一、大正八年農展にて褒狀を博し、同十年より同展に毎回三等賞を、昭和三年に二等賞を、同四年に三等賞を得
- 一、東京鑄金會展出品は大正十一年より二等銀賞を毎回受領
- 一、日本美術協會にては大正十三年三等賞、翌年推獎、昭和二年協會賞を、同三年、四年銀賞を受く
- 一、東京府工藝展にては大正十五年一等賞、昭和二年二等賞、同三年二等賞を受く
- 一、昭和三年帝展入選
- 一、昭和四年三月東京鑄金會第十九回展の審査員に推さる

一、昭和四年四月日本美術協會第七部委員を囑托さる
一、昭和四年四月國際美術協會にて褒賞を受く
現に日本美術協會、日本工藝美術會、東京鑄金會、帝國工藝會に屬し前途最も有望なる青年作家の一人者なり。

蒔 田 三 千 藏

出生地 青森縣八戸市下番町
現 住 秋田縣秋田市龜ノ町西土手町二三
明 治 二 十 六 年 七 月 廿 三 日 生
鑄 金 家



君は大正十年東京美術學校鑄造科を卒業し、間もなく岩手縣工業試驗場金工科主任として招聘され、次で秋田縣工業試驗場の新設と共に其懇望する所となり、大正四年一月秋田縣商工技師として轉任す。

由來君は鑄鐵品の製作者少なきと、一は舊南部藩の出身なれば、鑄鐵製品を専門的に研究すべく、學校卒業後、先づ南部盛岡に赴任せり、故に公勤の傍ら自宅に研究室を設け、専ら鑄鐵品の妙諦を研究し、大に得る所があつた。其得意作にしては

- 一、大正八年(在學中)農展に受賞
- 一、大正十一年農展に三等賞を受く
- 一、昭和二年帝展入選(鑄鐵製花瓶)

一、昭和三年同上入選(鑄鐵製釣香爐)
此他内外國各博覽會より受賞拾數回、君は最も年齒に富み、且つ熱心なる研究家なれば今後の造詣を最も期待さる。

【蒔 田 三 千 藏】

(七一)

湯 淺 守 一

出生地 京都市夷川宮小路木屋町
現 住 京都府山科町厨子奥、吉尾園
明治八年十二月十二日生
蒔 繪 師



て昭代の氣運に伴ふべく精進せり。

餘技として最も繪畫を善くす、門生數名、既に業を成せるもの、修業中のもの何れも師を學んで孜々乾々たり。家庭は令夫人との間に一男一女あり、氏も亦た福徳併有の一人者なる哉。

華曉ニ號す、初め其家嚴守隆翁(京都美術工藝學校最初の蒔繪教授)に就て蒔繪の技法を習得、更に古今の名器に就て研鑽多年、遂に其妙諦を得て一家を成す、又別に繪畫を森川會文翁に學ぶこと三十餘年にして益蒔繪の神髓を會得す其作品は餘り世間的に出さざるも、曾て商工展、美工展、國際展、漆工會展、京都工藝品展等にて屢優賞を博す、從來其得意作を稱せらるゝは、京都福田氏の依囑に成る料紙文庫大阪兒嶋氏の源氏模機料紙文庫等にて、其纖巧優麗の手法ミ得色は他の歎賞を博する所である。

現に六趣園及日本漆工會、漆工睦美會等に屬して其要地にあり、氏の作品は古典を尊重し、更に氏獨得の新意匠を加へ

井 高 歸 山

出生地 兵庫縣津名郡生穂村
現 住 東京市外神田區東大原一六一
陶 藝 家



名は今平、歸山は其號、別に南溪、香溪、不一庵又井庵、宗仙、再來庵の號あり、字は自澹、夙に兵庫縣立陶器學校(第一回)及出石陶器試驗所に業を卒へ、特に同所長友田安清翁の薫陶を受け、更に先代眞菴香山翁に學ぶこと五年

明治卅八年翁の薨に依りて輕井澤に淺間燒を創始して内外人の賞讃を博し、爾來繼續其業に従ふ。

又金澤硬陶會社の聘に應じて陶業改善に貢献し、次で新に金澤に築窯して今平燒を開始す、其間支那、朝鮮の古美術及光悅、仁清、乾山、木米諸家の秘鑰を討ね、併せて趣味ミして繪畫、茶道、篆刻を研究す、此他友田組陶器顔料製作に努力し功績少なからず、次で大正十年東都に新窯を築きて其本據を定む。

其作品は商工展其他へ出品して賞讃を博す、君は資性恬淡にして寡慾、常に俗塵を厭ひて清風明月を侶ミし、其心魂は一に名器の造出に結晶されて獨立自營、黙々として土と親しみ、自然を觀するの外、胸底、何物もなく、眞に十年一日の如し。

【杉原兵才】

(七四)

杉原兵才

出生地 姫路市舊屋敷町
現住 姫路市五軒邸二〇ノ二
明治五年一月十五日生
彫盆家



通稱瀬古、兵才は其號、君は刀劍師、精師の家に生る、父兵藏翁は斯道の名家であつた、然れ共廢藩後斯道廢れしたため、翁は獨創の奇木盆、彫盆の製作を正業とせらる、君は幼より之を習得し、且つ支那古來の作品及本朝名家の作を研究し頗る會得する所ありしが、更に躍起して其妙諦を討ぬべく、明治四十年中妻子を捐て、孤影飄然として藝術行脚の旅に出で、數年に亘り各地を歴遊し、歸來其技嶄然として認めらるゝに至る、今其光榮作の一斑を見れば

- 一、大正十年中國四國生産品共進會にて銀賞
- 一、同十五年全國産業博にて銀賞
- 一、昭和二年商工展に上選
- 一、同三年兵庫縣木工展に二等賞
- 一、同三年京都大禮博にて銅賞
- 一、同五年第十六回商工展に上選

一、同四年開院宮殿下へ兵庫縣献上品製作
一、同年國際美術協會展第一回に上選
此他長き邊へ献上、又梨本宮殿下、賀國宮殿下等より屢御用命を賜はる。又其趣味としては俳句、煎茶、盆栽、生花等に造詣あり、家庭訓滿、門生亦た師風を仰ぎて屹々たり。

六角紫水

出生地 廣島縣
現住 東京市小石川區久野町七四
慶應三年生
漆藝家



通稱注多良、東京美術學校漆工科卒業、同校教授たり、夙に岡倉覺三氏に隨ひ、横山大觀、菱川春草氏等と共に歐米に見學す。現に帝展審査員、帝國工藝協會理事其他斯道重要地位を占む。其作品の精巧優秀なることは屢内外諸展に優賞を博するに見るも其一班を知るに足る。

氏は斯道に對しては常に卓抜の見識を有して、往々俗論を容れざるこゝあるも、斷乎として之を決行一貫するの勢と勇氣の所有者にして、我が工藝界の情氣は氏の此意氣によりて刺激衝動を受くるこゝ多し。

名譽作としては曾て米國大統領の求めによりて作れるもの及び長き邊へ納めたる飾棚の如き、何れも氏が一代の心血を

澗けるものにて、一瞥人をして其技の絶妙を感歎せしめた。
教を受くる門生多數、既に堂々一家を成すもの多く、氏は他の赤塚氏等も雁行して我が漆藝界の重鎮たり、今後益氏の努力に啓發に待つもの多し。

【六角紫水】

(七五)

【鈴木玩々齋】

(七六)

鈴木玩々齋

出生地 愛知縣津嶋町
現住 大阪市東區空堀通二丁目五十九
明治二十四年九月生
竹藝家

通稱喜一、室を皆竹廬ニ稱す、君は幼より幾多の苦辛を嘗めて今日の地位を築き上げられた立志傳中の人である、君は年十六にして慨然志を立て、郷關を辞し、浪の花さく大阪に來り、先づ藝を執れるは竹工界の名匠山下巧竹齋翁

の門であつた。藝術は天の君に資へる特惠にして、其技駭々として上達し、大正二年(二十二歳)には尤可を受けて別に一家を立つるに至る。大正三年森華堂氏より元々齋の名稱を受け、次で同十二年紀元節に故渡邊復亭翁の勳に隨ひ現號玩々齋に改む。



啓の際、府立商品陳列所にて島府を台覽に供ふるの光榮に浴し、昭和四年六月 天皇陛下大阪行幸の御砌り大阪城行在所に於て平和花籃に天覽の光榮を賜はれり、又家具指物品評展に出品して二三等賞を併得し、全國竹器改良展には銅賞を、農商務省後援の全國竹材竹製品共進會には特別表彰狀(全國で四名)を、大阪府工藝協會主催競技會並に展覽

大正十一年 皇后陛下の住吉神社御參拜の際、盛花籃を觀賞に供し、同年五月英國 皇太子殿下大阪訪問の時、市廳舎にて花籃を台覽に供し、同十四年五月 攝政殿下大阪へ行

春花秋月夢中遷。已出鄉關二十年。誰識營々塵巷裡。風流呵筆起雲煙。

偶感

【鈴木玩々齋】

(七七)

會には通じて三回銀賞を、大阪市美術展には三回入選、特に第二回の際には美術協會賞を受領し、現に大阪府工藝協會會員及び同會内研究部幹事、大阪市美術協會會員、大阪竹籠業組合評議員、浪華精美會々員(美術工藝家團體)、藍友會々員(美術工藝家團體)、清風會主幹(山下門下生團體)、町會理事等斯道の各方面に充分に地歩を占め其人格と技術は年々共に向上進歩の一途に立ちつゝあり。

君の人となりは其の材料とせる竹に彷彿して酷似し、其直きこも竹幹に比すべく、其淡泊清虛なるこも竹心に異ならず、而も二十餘年に亘りて研鑽一日の如く、其技の妙に入るに其徳性は益々養せられ、尋常市人よりすれば一種別天地の人の如き光風霽月の趣あり。

君の竹技に於けるや其青年時代にあつては専ら精巧優雅の作品を得べく、寢食を忘れて没頭したが、年齒漸く加はり、技漸く進むに隨ひて自然の境に入り、個性の閃めける佳作は陸續として人目を惹くに至る。本技の外に精神の涵養と趣味の發揮とを兼ねて南宗の畫技を大橋香陵女史に問ひ、詩書を土田江南翁に學び、煎茶は花月庵流を好みて教を阪田智軒翁に受け、其他古瓦を蒐集して古代の紋様藝術の道程を究め、又髮竹の杖を蒐集愛玩し、日常製作に倦めば則ち飄然として塵外に悠遊するを樂しむ、家庭には義母と賢弟、現夫人との間に一男一女あり、春風常に堂に滿ち君の前途や實に多幸多望を以て嘯日せられてゐる。

【中 川 道 正】

(七八)

中 川 道 正

出生地 静岡市本通四丁目一
現 住 同 上
明 治 二 十 五 年 一 月 生
漆 藝 家

明治四十三年東上、漆藝の名匠川之邊一朝に學びて其堂奥に上る、其作品は大正五年以來、各地博覽會、共進會、

展覽會等に出品して名譽賞牌及金牌二、銀牌四、銅牌四、褒
狀五、感謝狀及記念狀十餘通を受領す。

次で商工展第十四回、第十六回に上選、今其關係團體を列
舉すれば

日本漆工會、漆藝會、川之邊社、木白社、靜陵漆藝若葉會
静岡工藝協會、土俗研究會、東海趣味之友社、靜陵圖案會
静岡縣産業協會、静岡漆器組合



等々多數の團體にありて、或は會員たり、或は幹部員たり、夫々その天職を盡くしつゝ、あり、特に静岡は地方漆藝の
淵藪にして屈指の地なれば、氏の如き新進有爲の材は新業に對する前途の負擔は隨つて重大なり、それだけ其の努力
精進を期待せらるゝ、所以である。

【津 田 信 夫】

(七九)

津 田 信 夫

出生地 千葉縣佐倉
現 住 東京市下谷區谷中天王寺町一七
明 治 八 年 生
金 藝 家

夙に東京美術學校金工科を卒業、且つ深く古今の名器優品に付研鑽を重ね、遂に蔚然一家を成す、現に東京美術學
校教授たり、大正一二年より三年間外遊して、大に歐州工藝の精髓を敲きて歸朝し、爾來自家の作品の上にも更に一
新境を開き、又青年子弟の誘掖ミ、本邦同業の啓蒙とに盡瘁する所少なからず、曾ては工藝の地位の稍もすれば他の
繪畫の下に置かれんとされしを、氏等の熱心なる努力によりて、今や帝展に工藝部の新設を見るに至り、我が工藝は
隆々乎ミして躍進の途に就くに至る。

X X X X X

氏は現に帝展審査員、日本工藝美術會幹事、帝國工藝會理事の要職を兼ね、且つ本年帝國美術院會員ミして斯界の
最高權威たる榮位に就く。

然るに我が工藝界の前途猶幾多の改善進歩を要する秋、氏の貢獻を待つもの益々多し。

赤塚自得

出生地 東京市
現住 東京市芝區新錢座町一六
明治四年生
漆藝家

通稱平左衛門、自得は其號なり、蒔繪の技法を其父祖に受け、且つ廣く古今名器に就きて研究し、深く造詣する所あり、其作品は内外の博覽會、展覽會等に於て幾回もなく優賞を博す。

其技法の巧妙にして、構圖の徹底せる行方は、恰もキビ／＼せる其人格の反影も見るべきである。曾て久しく農展其他の審査員たり、又帝展に第四部の設けらるゝや、先づ擧げられて其審査員となり、更に本年帝國美術院會員として、藝術界の最高權威の一人として推されしに見るも、氏の閱歷、貫祿、技倆共に斯道の元老として寄託さるゝことの深且つ大なるを卜すべし。

X X X X X X

人となり剛直暗潔にして、傳統的江戸藝術家としての風格を備へ、藝術の今後に於ける世界的新運命の開拓には、氏の力を持つものが頗る多い、左れば氏が藝術上の責任は公私兩つ乍ら懸けて其双肩にありと謂ふべく、切に其努力精進を望まるゝ所以である。

鑑名藝工



大國柏齋

出生地 大阪 市
現住 大阪 天王寺區國分町一七五
安政三年生
鑄金家

關西鑄金界の元老にして、夙に東郡に出で岡崎雪聲、正木直彦氏等に優秀なる其技を歎賞せられた、其作品は曾て幾十回に亘り博覽會等にて優賞を博したが、由來高蹈隱逸の風ありて、老來全く世塵を避け、唯僅に娛樂的に得意の藝術に耽るのみである。

X X X X X

三男子あり、長男壽郎君、家翁に業を承けて鑄金の技を修め出藍の譽あり、次男貞藏君は彫刻を以て既に帝展審査員の地を博し、三男藤三郎君亦た鑄金、彫刻兩つ乍ら之を善くす。

鶴は矢張り鶴を産む、其三子悉く藝に精し、翁亦た後ありと謂ふべし、翁の得意作は時々、大國一門展に見るこゝみあり、雅健幽邃の趣溢れて、斯道の鑑賞家をして垂涎措く能はざらしむるものがある。特に翁の釜に至つては茶人の座右を離しがたき天下一品のものとして珍重がられてゐる。

鑑名藝工



神 阪 雪 佳

出生地 京 都 市
現 住 京 都 市 外 嵯 峨 野 生 田
慶 應 二 年 生
圖 案 家

君は圖案界の元老にして、且つ京都工藝界の重鎮たり、現に京都美工院總務として令聞あり。

夙に鈴木瑞彦、岸光景氏等に學んで其堂に上り、明治三四年外遊して先づ歐洲先進國の長所を探り、歸來多くは斯道の師として立ち、裨益する所少なからず、品川彌二郎子等の大に信する所となれり。

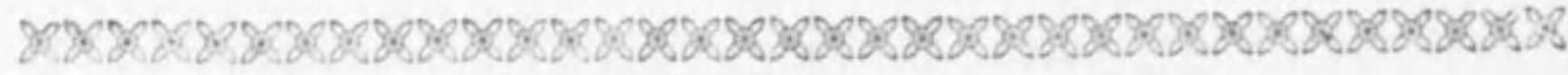
X X X X X X

其門弟子の優秀に山鹿清華氏等あり、又令弟に祐吉、松濤二氏あり、共に藝界に認めらる、君や人となり温厚圓満にして團體の首領たり、將た子弟の誘掖に最も適す、而も我邦維新の際に生れ、早く海外の文化を吸收せるため、他を導き世を裨益すること特に多く、爲に其筋にても屢君の功績を旌表し、又佛國政府よりも名譽ある勳章を贈呈せらる、に見るも其一班を知るに足らむ。蓋帝室技藝員たり、將た帝國美術院會員としての有資格の一人者たるを疑はず

工 藝 名 鑑



工 藝 名 鑑



清 水 六 兵 衛

出生地 京 都 市 東 山 五 條 阪
現 住 同 上
明 治 八 年 生
陶 藝 家

代々陶業を以て傳へ六兵衛を通稱す、當主は夙に府立畫學校卒業、京都陶磁試驗所修、又幸野模嶺に畫を學ぶ、佛國サロン準會員、帝展審査員たり、其作品は屢内外の博覽會、展覽會等に出品して優賞を博す、此他宮内省御用として、又近年御大典舉行毎に府市の依頼、或は自個より優麗なる作品を納めて聲譽を重ぬ。

X X X X X

京都美工院、日本工藝美術會其他幾多の工藝團の重鎮として斯道の進歩發達に貢献しつ、あり、令嗣正太郎氏、亦陶界の新人として帝展に連年佳作を發表して大に其前途に嚆望さる。

氏の如きは實に斯業の名門にして且つ物質の蓄積に富み、加之に優秀なる技倆の持主なれば斯業を國家的に大に發達せしめ、之を歐米に輝かすの撰手として其衝に當つて賈はねばならぬ、此点に就ては最も適任の一人者であろう。

岩村光眞

出生地 京都市
現住 京都市柳馬場通丸太町角
明治十八年四月十五日生
漆藝家

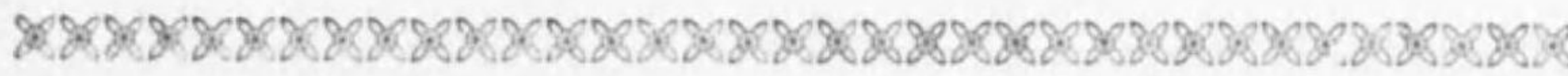
通稱眞次郎、夙に京都市立美術工藝學校を卒業す、其作品は各地展覽會、博覽會等に出品して入選入賞其數を知らず、京洛漆藝の名手たり、現に京都市立美術工藝學校教諭にして、又京都美工院同人たるに見るも、其力量・手腕・聲望の一斑を推知するに足る。

X X X X X X

現今の京洛漆藝界には迎田氏兄弟、戸島光宇、江馬長閑、神阪祐吉、堂本伍三郎、山田樂全其他名士濟々の觀あり就中君は其純眞の技術・周到の意匠に於て独自の境を拓き、且つ幾多の青年子弟を率ゐて其進歩發達を鼓舞誘掖する處に、其人の風懐が偲ばる。

蓋藝術家として其年齢の上よりすれば、君の如きは今後の十年二十年が最も醍醐味の存する所なれば、その眞個大成の作品は今後に於て之を見るべきで、君たるもの亦た不朽の傑作を留めて百世の範を示さざる可からず、記者は本書重版の時に謹んで其作を細寫するこゝの光榮を亦た今後に期待するものである。

工 藝 名 鑑



工 藝 名 鑑



宮永東山

出生地 舊金澤藩士
現住 京都市應天門三條上
明治元年生
陶藝家

君は夙に文明の新機運に乗して東上、佛獨語學校を卒業して先づ獨佛文化の道程を研究し、横濱外國商館に勤めて實際の見學を積み、一轉して東京美術學校、農商務省等に奉職するこゝ前後七年に及ぶ。
次で一千百年の巴里萬國博に官命を帯びて差遣せられ、其機に於て他年研究の結果を實際に對照するこゝを得て啓發する所少なからず、歸朝と共に野に下り、故錦光山宗兵衛翁の知遇を得、遂に同家顧問として京都に來住し、爾來一意陶藝の研究に没頭し、錦光山翁の妙諦を會得し、別に獨自の見地を參酌して一家を成す。

X X X X X

明治四十二年三越呉服店に初めて美術工藝部の設置さる、や、君は其製造販賣に就て大に斡旋の勞を執る。
次で伏見稻荷山麓に地を卜して陶窯を築き、幾多の佳構名品を出し、京洛陶界に嶄然一頭地を抜く、斯くの如く君の行徑は多岐に亘り海の東西に知己を有するを以て、君の名聲は最も廣く遠く洽布せらる、而して其老と共に益研鑽を勵むに至つては、多く比を見ざる所なり。

魚野自醒

出生地 石川縣
現住 京都市上京區鹿ヶ谷宮之前二八五
明治十六年生
漆藝家

通稱自作、夙に東上して漆藝界の巨匠赤塚自得氏に受けて其堂に上る。

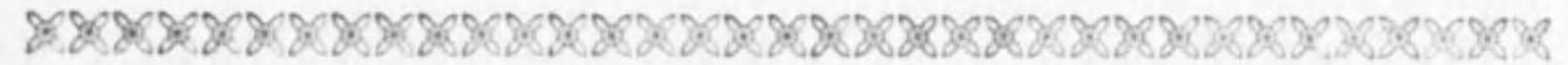
居を京都に移して年既に久しく、優麗なる山川風土の美を其作品の上に収めて、内外幾多の博覽會、展覽會に出品して賞牌を受領し、京洛の漆藝諸家と相伍して、益其技に精進す。

× × × × × × × ×

帝展第四部の開設せらる、や連年上選し、益其前途を刮目せらる。現に日本工藝美術會委員、京都六趣園會員たり由來漆藝は東洋特殊の藝術にして、之を翫味すれば津々ミして限りなき雅趣を有するものなれども、他の繪畫の如くに世間的眩曜の地に至らざるは甚だ遺憾に堪へざる所である。

此時に方り之を宣揚し之を弘通して世界の誇りたらしむるは、一に氏の如き前途ある熱烈の人に待たざる可からずその漆藝家として責任や亦大なりと謂ふべし。

工 藝 名 鑑



工 藝 名 鑑



板谷波山

出生地 茨城縣眞壁郡下館町
現住 東京市外田端五一二
明治五年三月三日生
陶藝家

通稱嘉七、陶藝を以て現代斯道の權威たり、明治二十七年東京美術學校彫刻科を卒業す。



其作品の優秀高逸なるは夙に江湖の認むる所にして、就中青磁其他古代陶磁の研究と、新古技法の表現に至つては獨得の創意を有して他の意表に出づるもの多し、其得意作ミしては昭和三年帝展第四部に出品されたる花瓶の如きは一躍して院賞の榮譽を博し、以て現代斯界の耳目を驚倒せり、此他從來各展に發表されたる諸作亦みな其技の凡ならざるを見るに足る。現に帝展工藝部審査員にして、又帝國美術院會員ミしての最高光榮を有し、猶且つ屹々ミして斯道獎勵の重鎮たるミ共に、自家向上の一途に精進せり。

【村 中 乾 泰】

(八八)

村 中 乾 泰

出生地 北陸伏木港
現住 京都府山科町御殿中内
明治二十四年十二月生
彫塑及鍍金家



紫雲洞ミ號す、年十一にして縣立富山工藝學校に入り、彫塑及鍍金を學びて業を卒え、更に幾多の古名品に付き研鑽をなし遂に一家を成す。

× × × × × ×

君は常に超然として群衆ミ喰喝するを厭ひ、初より某々團某々會等に屬せず、一人一黨主義に依りて精進し、唯快心の作を得るを以て其至樂ミす。

× × × × × ×

餘技として墨畫を善くす、目下門生二名あり、師弟克く相和し、家庭圓滿、亦た春風嬌々裡の福祉に浴する一人者である。

【小 野 嶋 知 文】

(八九)

小 野 嶋 知 文



出生地 甲 府 市
現住 東京市本郷區駒込千駄木町二六三
慶 應 三 年 生
金 工 家

初め金工の技を故帝室技藝員中田宗幸氏及故前澤定次郎氏に學んで其堂奥に上る、得意の作品ミして明治四十三年

五月東京美術工藝展覽會に三色別合花盛器を出品して一等賞の榮譽を博す。

此他内外各展に出品、幾多の賞牌を獲たり、作風は古典に準據して別に一家の創見を加へて嶄然衆目を惹く。

× × × × × ×

人ミ爲り温厚篤實、老後を藝術に捧けて其の三昧に入る。

蓋し其作の佳にして雅なるものは寧ろ其老境に於て之を見るこゝを得むか、氏亦た自謙加餐して宜しく百歳の壽を保つべし。

戸嶋光孚

出生地 京都市
現住 京都市上京区加茂川堤出雲路橋上ル
明治十五年生
漆藝家

夙に蒔繪を先代光則翁に學んで其堂に上る、次で京都美術工藝學校を卒へ、又別に日本畫を竹内栖鳳氏に、洋畫を淺井忠氏に問ひて、且つ周圍の古刹、神祠等に秘藏さる、古名器に就て啓發する所少なからず、遂に堂々一家を成す蒔繪の外に氏は特に漆料を善くす、その色紙、短冊等に時々魚鳥花卉を描くや、筆致暢達、漆痕淋漓、恰も碧雲の躍るが如きものあり、亦た一家藝として誇るに足る。

X X X X X

現に京都美術蒔繪學校顧問、京都漆匠會代表委員等たり、専ら斯道の向上進歩に盡くす、京都には此他幾多工藝美術團體あるも、氏は獨自の見地を有して、常に孤往邁進の態度を執り、一面には子弟の誘導に努め、他の一面は十年一日の如く自家藝術の開拓に熱中するの外、亦他の何物をも知らざるもの、如し。

工 藝 名 鑑



淺見清壽

出生地 東京市小石川區柳町九番
現住 東京府荏原郡世田ヶ谷町代田中原一〇一〇
明治十年六月二日生
彫家

通稱清次郎、皓泉齋清壽と號す、其技を小林健次郎翁に學び、芝山派の彫嵌の精妙を究む、快心の作としては



- 一、御前製作の光榮を得
 - 一、明治神宮の神寶製作
 - 一、大正天皇の御大典御用製作
 - 一、朝鮮神宮御神寶製作
 - 一、今上陛下御大典御用製作
 - 一、伊勢大廟へ献上の御神寶製作
 - 一、昭和四年式年の伊勢大廟御遷宮御神寶御用製作
 - 一、兵庫縣官幣中社長田神社御神寶製作
- 此他日本美術協會其他各展へ出品して入賞多數を得。

現に日本美術協會、日本水産工藝協會其他の會員として重視せらる、主義としては御神寶製作、手元道具、建築其他螺鈿金銀、天然物應用彫嵌に重をおく、又餘技として木彫に精しく、茶道は正式織部本流に通ず。家庭にあつては令夫人も斯道の造詣あり、俱に共に同藝相樂しむの福祉を有せらる。

工 藝 名 鑑



【安 原 祥 窓】

(九二)

安 原 祥 窓

出生地 金澤市荒町
現 住 大阪市南區鹽町三丁目一
明 治 十七年五月廿九日生
蒔 繪 師

通稱勝守、祥窓は其雅號なり、夙に蒔繪を家傳の清翁に、又繪畫を渡邊祥益及武部秋睦の二氏に學んで其神髓を會得して一家を成す。



快心の作に長生殿文庫硯、近江八景文庫硯等あり、又世に公にせるものに就いて之を見れば

- 一、第五回博覽會に三等賞
- 一、商工省展に數回上選、且つ三等賞
- 一、巴里萬國工藝美術博覽會に名譽賞
- 一、帝展第四部上選

現に大阪府工藝協會理事、日本工藝美術會委員、大阪市美術協會幹事、日本漆工會地方委員、無絃社同人。

主義として温故知新、餘技としては謠曲、茶道を善くし、門下生數名あり、家庭亦た極めて圓滿、蓋し最も常識に富み、且つ精力一貫の紳士として浪華工藝美術界代表の一人者として尊敬を表せらる。

【田 邊 竹 雲 齋】

(九三)

田 邊 竹 雲 齋

出生地 尼ヶ崎 市
現 住 堺 市 市 之 町 中 濱
明 治 十 年 生
竹 藝 家



通稱常雄、君は十九歳にして初代和田和一齋に就き竹藝を學びて竹籠製作の妙諦に通ず。

快心の作としては廿五歳にして富岳籠を、又た最近巖伏籠(和歌山城の名に因んで)に名聲を博す、先年巴里萬國博出品、由來君は多作せず、而して偶製作すれば手法暢達、意匠高雅、尋常工人の企及しがたき氣品は先づ人の五感を魅するに足るものがある、是その君の主義として一品一器悉く永遠の生命あらしむるさいふ立場より出でし爲めであらう。

現に大阪美術協會、大阪工藝協會等の會員たり、餘技として生花、煎茶に通じ、何れも宗匠格たり、目下其門生は籠に五名、花に六十名を算し、令名高し、家庭は二男二女あり、亦た春光爛々滿堂に輝くの福祉を有するの人なり。

【木 村 臥 山】

(九四)

木 村 臥 山

出生地 新潟縣岩船郡村上町本町
現住 東京府下日暮里渡邊町一〇四番地
明治十四年二月生
漆 藝 家

通稱龍之亮、夙に東郡に出で、研究を續けて一家を成す、特に螺鈿細工に妙を得たり。

其作品は明治、大正、昭和の各時代を通じて諸展に出品し
て賞を獲るこゝ數回。

× × × ×



當初より一人一黨主義にて、他の何の團體にも屬せず、唯
自個好む所の漆藝に没頭し、快心の作を得るを以て其生命を

し其至樂としてゐる。家庭亦た圓滿無碍の多幸なる一藝術家である。

【龍 村 平 藏】

(九五)

龍 村 平 藏

出生地 大 阪 市
現住 大阪市東區安土町一丁目廿一番地
明治九年十一月生
染 織 家

君は染織界の權威として衆望を負ひ、三都の大百貨店の染織展に、常に莊重高雅なる獨特の作品を展覧して新道の
愛好者を驚倒してゐる。現に帝展にても本年君を推薦して其妙技に裏書した。



君は斯道の天才にして夙に染織の技に熟中し、之が爲に數
十萬の資財を擲ちて遂に古代織物の根本的研究を遂げ、遠く
支那古代の周漢、普唐より我邦にあつては推古、天平朝の最
古の織物に就きて凡ゆる苦辛を拂ひ、遂に其等の古名裂に寸
毫も違はざる作品を出して大に斯界の注目と尊敬を惹く。
君は常に染織に云はず、各般の美術に於ける造詣深く、今
後我美術の世界的發展には最前線に立つべく嚆望さる、唯一
人者である。君の染織に於ける事歴と功績は枚舉に暇あらざ

れば之は別に機を得て紹介すること、し茲には單に君の大觀を掲ぐるに過ぎず。
其人となり任侠皓潔、餘技は和歌を善くし、書に巧なり、談論風發し、常に人を春風台蕩の中に措くのが概があ
る。

【前田竹房齋】

(九六)

前田竹房齋

出生地 大阪府泉北郡久世村
現住 同上
明治五年五月生
竹藝家

通稱房二郎、年十三にして竹籠の製作を志し、爾來古今の名器を研究し、或は現代の名匠を敲きて其妙諦を探り、遂に一家を成す、其作品は



- 一、明治二十五年第五回勸業博に出品して入賞
 - 一、富士の曙を銘せる籠は自然竹の十一枝、長三間の竹根を以て自然そのまゝを應用して編上ぐ
 - 一、昭和四年 天皇陛下大阪行幸の際、府農會より献上の竹籠を謹製
 - 一、大阪府工藝展に出品して銀賞を
 - 一、全國勸業展に二等賞
 - 一、商工展に二點入選
- 現に大阪府工藝協會、同市美術協會の會員たり、主義とし

ては竹の自然を活用して之を作品の上に取り入るゝにあり。餘技に生花を善くす、門生二名、二男三女の子福者にて和氣滿堂の多幸なる人である。

【古橋留吉、市岡紫雲】

市岡紫雲

出生地 東京市芝區金杉三ノ一
現住 東京市麻布區霞町六
明治十二年八月生
鑄金家

君は夙に鑄金の技を斯道の名家大嶋如雲翁に學ぶ、現に日本美術協會、東京鑄金會、工藝美術會に屬し、幹事或は審査員たり、其作品は明治四十四年勸業博に「遊鯉」を出品して三等賞を得、其他各展に佳賞を博す。

古橋留吉

出生地 愛知縣碧海郡吉濱村
現住 東京市芝區西久保巴町四十一
明治十一年十月生
漆藝家

號章月、當初東京市麻布區森元町一ノ廿三の神林默蓮氏に就きし研究し、後一家を成す。現に日本漆工會に屬し、夙に農展に出品して二三等賞を得、就中茄子模様視箱に名譽を博す。

(九七)

【宮本忠平、永堀芳雲】

(九八)

宮 本 忠 平

出生地 奈良縣添上郡東市村古市
現住 大阪市住吉區大王寺町三三三二
明治十八年三月生
圖 案 家

通稱忠平、號彩江、君は東京高等工業學校圖案科出身、圖案及工藝(木工、染織)を研究す。
現に帝國工藝會、日本工藝美術會、工藝無絃社、大阪府工藝協會等の會員及幹部たり、其作品は巴里萬國工藝博覽會、商工省工藝展、日本工藝美術展及昭和四年度帝展第四部に上選。
主義は綜合藝術にして、餘技として日本畫花鳥を善くす、人となり亦た温厚篤實を以て聞ゆ。

永 堀 芳 雲

出生地 東京市外田端一九五
現住 同上
明治二十八年生
彫 金 家

夙に井川松齋氏に彫金の技を學んで一家を成し、其作品は日本美術協會其他に出品して賞讃を博す。
其作風は堅實にして其技老熟し、作品の上に善く其人格を表現さる。

【小 笹 樂 山】

(九九)

小 笹 樂 山

出生地 京都市富小路御池下ル
現住 同上
明治二十五年三月生
漆 藝 家



君は夙に漆藝の老大家山田樂全翁の門に入りて研磨琢磨、十有餘年に及び、遂に一家を成す。

× × × × × ×

現に昭和工藝協會、柳美會、美好會、宗漆園等の同人たり

又漆器同業組合の代議員である。

其作品は各種博覽會、展覽會に入選し、賞牌を受くること

枚舉に遑あらず。

× × × × × ×

餘技として川柳を善くし、京都川柳社々長として推さる。門下生二名あり、君は今や春秋正に酣に、其技はより大に精彩を加ふるの時なり、大に今後の作品を刮目さる。

【高木治良兵衛】

(100)

高木治良兵衛

出生地 京都市三條通釜座町
現住 同上
明治十四年八月生
師

幼名治三郎、祖父の名を襲ぎ現名に改む、夕秀又快軒と號す、初め鑄釜の技を大西淨長翁に學び、後家殿に就き其

秘法を受け遂に一家を成す。

× × × × ×

現に東京鑄金會、昭和工藝會等の會員たり、其作品は内外の諸展に出陳して屢佳賞を博す。

× × × × ×



餘技として俳句に興味を有し、現に門下生三名あり、家庭和平圓滿、他の稱贊する所なる。

【奥村定一、林不二男】

(101)

林 不二男

出生地 新潟縣佐渡相川町
現住 東京市芝區西久保八幡町九
明治三十四年四月生
金 藝 家

號美悦と稱す、君は夙に東京美術學校金工科本科を卒業、現に朝會同人として錚々の一人者たり、其作品は屢各展覽會に出品して佳賞を博す。

餘技として陸上競技及室内運動に興味を有す。家庭亦た圓滿の令聞あり。

奥村 定 一

出生地 東京市本所區表町四十六
現住 同上
明治三十二年生
圖 案 家

夙に獨自の研究に依りて圖案の上に一家を成す。其作品は商工展第十四回より引續き上選。

主義は精細なる機械化せざる證券圖案及び其延長、又餘技として山岳蹴毬、蜻蛉類の採集に長す。

【宮澤均、穂山竹林齋】

(1011)

宮澤均

出生地 前橋市
現住 大阪府南河内郡高鷺村惠我莊
明治三十年一月生
金藝家

君は東京美術學校鎚金本科及研究科修業、現に大阪府立工藝學校金屬工藝科を指導し、又日本工藝美術會々員及大阪府工藝協會會員たり、其名譽作としては第八回帝國美術院展覽會第四部に出品上選、此他各展に屢譽譽を博す。兎も角も前途最も多望なる青年作家の一人者である。

穂山竹林齋

出生地 京都市下京區本町
現住 大阪市西成區粉濱本町
明治廿四年三月生
彫刻家

君は初代一光氏より二代目にして彫刻の上に独自の境地を開闢す。

【鈴木表朔】

(1012)

鈴木表朔

出生地 滋賀縣高嶋郡本庄村字南舟木
現住 京都市油小路三條上ル
明治六年六月生
漆藝家



通稱捨吉、君は漆藝界の名人たる木村表齋氏に就き、十三歳より廿六歳迄師事し、刻苦研鑽の結果、遂に堂々一家を成す。現に美工院評議員、漆工會幹事たり。

其名譽作としては

- 一、明治四十二年伊勢大廟御神寶其他を
- 一、大正十四年御即位式高御座、皇后宮御座とお歳旗其他塗一切擔當拜命
- 一、昭和三年御大禮御即位式萬歳旗其他塗御用拜命
- 一、昭和四年宮中御用拜命並に式外塗列許可

右の外内外各博覽會、展覽會、競技會等に出品して授賞を獲るこゝ多し。

門生に表星、金平、茂氏等あり、皆屹々師風を承けて研鑽中にあり、一子貞路氏は美工院々友として出藍の譽あり

高橋清山

出生地 京都市五條阪五丁目
現住 同上
明治四年三月生
陶藝家

夙に陶藝を修得し、且つ五山、中澤岩太氏等の指導を受け、繪畫は岸派の精髓を會得す。

× × × × ×

現に京都美工院會員として重をなす。快心の作は染付ものにして、其形容の整備と釉藥の高雅なる獨自の境地を開く。

君の作品は屢商工展に出して二三等賞を連續受領し、其他の博覽會にて金、銀、銅等の賞牌を受く。

× × × × ×



餘技として最も畫に妙を得てゐる、人となり亦た朴茂恬淡を以て稱せらる。

工 藝 名 鑑



梅村芥舟

出生地 埼玉縣
現住 東京市下谷區清水町十二
明治十七年三月生
鑄金家

通稱三橋、君は其技を東京市下谷區上野花園町十五、故大原豊舟翁に學んで堂に上る、現に東京鑄金會及美術協會等の幹部員たり。

其作品は各種展覽會に出品して屢銀銅牌を得、餘技として邦畫を善くす。

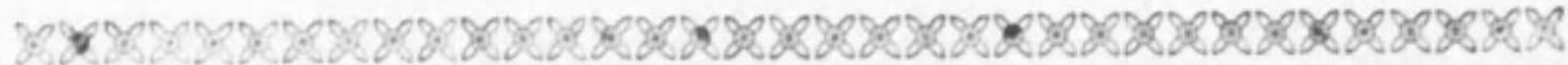
後藤駒雄

出生地 東京市下谷區谷中眞島町七
現住 東京府下金町八百二番
明治二十一年五月生
鑄金家

夙に東京美術學校鑄造科を出で、更に古今の名器に就き研鑽を重ねて一家を成す、其作品は商工展其他に上選、且つ佳賞を博す。

餘技として近代的寫眞藝術に造詣深し。

工 藝 名 鑑



【崎川羊谷、池田泰山】

(一〇六)

崎川 羊 谷

出生地 宮崎縣延岡
現住 下關市本町六丁目
明治卅二年五月生
硯彫刻家

君は通稱蓮ミ呼ぶ、夙に硯彫刻を原口梅羊翁に學ぶ、後一家をなす、其作は商工展及び美術協會展等に上選し、猶
畏き邊へ謹作の硯を献上嘉納せらる。

池田 泰 山

出生地 京 都 府
現住 京都市外花園村西木辻
明治二十四年生
陶 藝 家

氏は夙に京都市立陶器試験場講習所本科卒業、且つ廣く古今の名陶を研究し後一家をなす、其作品は各種博覽會及
展覽會等に屢佳賞を博す、前途多望なる作家の一人者たり。

【鈴木美彦】

(一〇七)

鈴 木 美 彦

出生地 東 京 市
現住 東京市下谷區上野櫻木町二二
明治十七年生
彫 金 家



なり老實眞摯にして同人間の敬服する所なる。

君は夙に東京美術學校を卒業し、且つ明治時代を代表せる彫金大家美盛、勝珉の二翁に就きて其技を研磨し、更に

内外の名器を參照して遂に一家風を成す。

其作は内外の博覽會、展覽會に出品されて屢金銀銅牌の光
榮ある佳賞を博す。

× × × × ×

君の佳作に對すれば古典的雅致津々として表出され、且つ
其技の練達徹底せることに於て現代の珍せらる、又其人ミ

石野龍山

出生地 石川縣
現住 金澤市西町三番町十八番地
文久元年生
陶藝家

夙に中濱淵、八田逸山を師として學ぶ、九谷陶器の衰微を慨して起ち、大に其改善進歩に盡くし、且つ海外輸出に適すべく、幾多の苦辛を重ねて其目的を達した、九谷陶器の今日あるは氏の力に藉るものが多い。

一例を舉ぐれば九谷燒の貿易商綿野吉次氏より米國行のコーヒ茶碗一打に支那の百老を描くこみを托されたが米人より更に其に三萬の百老を描くこみを望まれて其通りに造り上げた事もある。次で其作風を一變して九谷燒に支那の南京風を取入れ、第五回の内國博に黃南京の香爐を出したが、其れには審査の標準が立たなかつたこの事である。

X X X X X

抑も石野赤稱する赤南京に着手して成功せし等、今日の九谷燒をして再生の境地に立たしむるに至れるは、一に翁の力多きに依る。而して人格亦た皓潔にして藝界稀に見る所なり。其令弟に石野香南氏あり、西宮市に隱れ、詩、書、畫三昧に入り、其人格の高逸と其作の洒脱に於て令聞高し。

工藝名鑑



工藝名鑑



久須來郎

出生地 大阪市東區淡路町二丁目七六
現住 同上
明治八年十一月生
指物家

通稱喜太郎、來郎と號す、多く雅號を以て聞ゆ、初め獨自研鑽を續け、特に古美術、古建築に精通し、又茶道各流を究め、特に藪内流に堪能なり。

X X X X X

現に大阪府工藝協會、大阪市美術協會の審査員、其他同業組合の代議員たり。

其作品宣傳を好まざるも、時代の風潮に餘儀なくせられ、近來屢他に出品するこみ、なつた。



餘技として文字と繪畫の彫刻をなす。子女七名あり、皆優秀の才子才媛にて多幸なる家庭の持主なり。又傍ら門生を養成しつ、其道に精進せり。

鑑名藝工

錦光山誠一郎

出生地 京 都 市
現住 京都市應天門通三條上ル
陶 器(粟田焼)

錦光山家は陶師として京都に於ける權威で、粟田焼を世界的に普及せしめた元勳で、今日の如くに之を發達せしめし道程には父祖二百七十年來多大の苦辛が集積されてゐる。同家の始祖は小林徳右衛門云ひ、正保二年一家を成し、鍵屋と號し將軍家御用を勤め粟田焼の名聲漸く高く、其三代茂兵衛氏に至り陶師を錦光山と稱せしが、後世之を以て姓に換ゆ。

次で第六代宗兵衛氏(慶應年間)海外發展を企て、其製品に大改良を加へて遂に今日の隆昌を招いた。京都陶磁の海外輸出は實に錦光山家を嚆矢とす。斯くて先代宗兵衛氏は親しく歐米生産地を巡歴し彼地の長所を取入れ京都陶磁製作の革命を促した。即ち夫の液體金の應用、又西洋繪具を利用して薄彩色を自由にせること、花模様を光線振草花になす工夫、光澤消の發明、日本繪畫で元祿模様を利用し、仁清寫を用ゆる等、其研究と考案によりて新界に貢獻せるもの枚舉に暇あらず。錦光山焼の世界に喧傳さる、亦所以なきにあらず。現主誠一郎氏は先代宗兵衛氏の息で、今や其業務の擴張に「日用品の藝術化」を標榜し、人間の趣味生活の向上に努力し、傍ら歐米諸國に於ける工藝參考書絶版もの、直輸入を企て、學界に貢獻しつゝ、ある新界の好紳士である。

鑑名藝工

岩村貞藏

出生地 京都市中京區高倉押小路南
現住 同上
明治十七年一月生
漆 藝 家



君は哲賢と號し、漆藝の名門に生れ、其技の遺奥を慈父の手によりて傳へられ、更に獨自の研究を加へて遂に一家を成す。其作風の温雅にして優麗なるは夙に新界の稱賛する所である。

X X X X X

其作品は屢内外の博覽會、展覧會にて佳賞を博し、今や京都に於ける漆藝界の中堅作家として重をなす。

令弟岩村光真氏亦た斯道の秀才にして、帝展出品作家とし

ての新進たり。

君は現に京都美工院の一人として其根幹たり、其人となり亦た温健老實を以て稱せらる。

三上治三郎

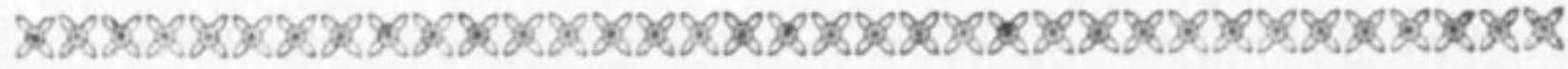
出生地 京都市
現住 京都市四條高倉
明治十一年生
漆器、楊光堂

君は義に京都漆器同業組合長たり、現に其顧問として漆器の進歩發達に貢献しつゝあり、其先は近江源氏佐々木氏に出で、祖父次郎氏京都に漆器業を始め、君は其二代目たり、京都の漆藝をして今日の隆盛を來さしむべく父祖の志を承けて幾多の苦辛を重ね、遂に廣く歐米諸國に輸出し、優秀なる我が漆藝を認めしむるに至つた、其點よりして君は漆藝上に於ける恩人である。

X X X X X

今や京洛に集くへる漆藝家は百を以て數ふべきも、其作品を天下に普及せしむるの商才に長け、且つ藝術眼に富める君の如き人なくんば、漆藝の世界的發展は不可能であつた。是れ特に揚光堂當土を本編に紹介する所以である。

猶堂號の揚光は明治三十四年、時の宮相出中光顯伯の命名されしものにて、伯は當時日本漆工曾々頭の地にあられた、めである。此他明治卅一年京都に催された全國漆器生産府縣聯合會への出品作は金牌首席となり、又曾て宮内省御紋章入の御用品其他 今上陛下の御即位式には萬歳旗を、又神宮式年御遷宮の式典には御神寶搨、香爐其他謹製する所の作品は何れも無上の光榮に浴す。



般若富久造

出生地 東京府
現住 東京市神田區裏猿樂町三二
明治卅一年三月生
染織、刺繡家

君は夙に獨自研究を積みて一家をなす。現に日本美術協會、エス・エス作家協會、高冷社、帝展工藝部等に屬す。門生は四五名あり、趣味として寫生旅行を好み。

山野長江

出生地 山口縣長府町
現住 大阪市西成區粉濱町四之町
明治十二年生
木彫家

君は通稱長介、夙に木彫を研究して一家を成す。現に木生社、大阪美術協會、同工藝協會員として屢佳作を出し、江湖の注目を惹く、其作品は諸種博覽會、展覽會に佳賞を博す。

【岩田藤七、内藤俊一】

(一一四)

岩 田 藤 七

出生地 東京府
現住 東京市牛込區辨天町八〇
明治二十八年生
彫刻、金藝家

君は夙に東京美術學校金工科及洋畫科を卒業す、現に本郷繪畫研究所會員、其作品は帝展彫刻部に四、五、六回上選、又同工藝部第八回上選、第九回に特選となる、前途最も有望なる作家としての一人者である。

内 藤 俊 一

出生地 山梨縣
現住 東京市本郷區動改町二七四
漆藝家

君は通稱國平、初め故島村俊明翁の高弟大芝俊峰氏に就きて木彫を學ぶこゝ十五、後獨自の研鑽に依りて彫漆に没頭すること十年、遂に一家を成し、其作品は屢各種博覽會、展覽會等に出品して佳賞を博す。

特に第一回聖德太子奉讃展には 故久邇宮殿下より特に御紋章付香合を下賜さる。而して君は更に獨創の見地を開拓すべく新工藝美術の上目下特種の研究を重ねつゝあり。

濟 本 義 之 助

出生地 大阪府下豊能郡藏人村
現住 大阪府北區源藏町天神小橋畔
美術石匠 明和元年創業 登録「平清」
合名會社 商標

君は山口義房翁(山口周防守の流を流む)の愛孫に生る、即ち兩刀を横ふる堂々たる武門の血を受け繼いだ。而して七歳にして縁あつて今日の濟本家に養はる。回家は明和元年以來連續白六十餘年に亘りて石匠を營み、技術の優秀を以て浪速名物の一に數へらる。



然るに岳翁清兵衛氏は工人としては稀に見る温和な質であつたので、往々情に絆されて營業上の損失を重ね、随つて家運衰頽に陥つた。此に於て英氣鬱勃たる當年水の出初め君は之を座視するに忍びず、慨然として海外雄飛の志を立て、七八の同志と共に北米テキサス洲に飛出した。彼地にては米作をやつたが、種々の故障を生じて折角の努力も失敗に陥つたので、一同は止むなく歸朝したのに、君は獨り慨然として踏止まり、其れより幾多の辛苦に堪へた。

而も皇天は君に前途の光明を與へた、即ち某教會の周旋にてソール氏の下に住込み、言狀し難き困苦を嘗めつゝも飽くまで誠意と努力とを捧げたので、漸次其志を酬ひられて遂に第三のマネジャーとなり、世界名物販賣店の一部に日本名物店を經營することとなり、益顯詞に榮えて來た。

此時既に在米五年に及び、相當の蓄積も出來たので、新に一事業を起し、米國の土にむきし、一先つ歸朝、家

【濟本義之助】

(一一五)

事を整理すべく、一同に別を告げて浪の花さく故國の都に歸つて見れば、憐むべし家産は殆んど蕩盡され、岳父は窮苦の底にあり、加之に北區大火災の厄に遭ひて見るも無徳の状態であつた。

瀧石に鐵心石陽の君も、この慘狀を眼前に展開されては救済の念を促さざるを得なかつた。殊に慈悲と義勇の念に燃ゆる君のこゝろで、好天もつ斯うなつては止むを得ない、海外の雄飛を斷念し、一家の復興に盡さんと思ふ決心し、折角新調のハイカラ洋服をも絆纏衣に換え、一の石工として奮闘の主體となつた。

何がサテ當時の石匠間は幾多の弊害が山積されてゐたが、君は斷乎として之を排斥し、一誠意と美術的な満足をも以て其業に臨み、且つ米國仕人の宣傳法によりて廣く其用途を弘通したので、君の聲名は忽ち旭日の如くに揚り、其技術の優秀さは時代の精神を盛つて傳播されたので、各地に於ける記念碑、石塔、銅像臺石、美術浮彫、肖像等の如き注文の陸續としてその店頭に幅濶する如になり、遂に美術石匠として「天下の平清」を以て鳴るに至つた。現に今日では内地は勿論、遠く朝鮮、臺灣、英領シシマより米國ヴァージニア洲に及び、個人も官衙も平押しに殺到する、の光景で、其業績に對する賞讃辭、褒狀等山積しつゝあり。

X X X X X X X X

以上は君が浮世の家業の上の道程であるが、君の胸中には猶洋々たる別天地ありて、夙に禪機に參して彼岸の月を見るべく、京都妙心寺池上惠澄老大師に就きて允可を受け、紫衣を許さる。又趣味として茶に精しく、書畫を愛す。夫の如是會、法悅會其他三四の團體あり、皆君の主唱設立する所で、是は自己の法悅と併せて衆生濟度の菩提心の發露されたものである。

黄金に眼眩み、塵垢にあえぐ浪速二百有餘萬の衆生の中にありて君を見るのは眞に佛陀の餘光を如實に仰ぐの感がある。君は法號を「活堂」と稱し、其老と共に益活々として不斷の精進を續けつゝある處に、愈其人格が徳ばるゝ。

(寫眞は法衣を着せる濟本氏)

工 藝 名 鑑



植 松 包 美

出生地 東京市日本橋區本石町
現住 東京市外濠谷町聚樂二十番地
明治五年十一月生
蒔 繪 師

通稱彌太郎、夙に蒔繪の妙諦を其家駁抱民翁及光景翁に學び、更に古今幾多名品に私淑して研磨工夫を積み遂に蔚然たる一家を成す。其作品は屋内外の博覽會、展覽會に出品して金銀銅牌等の佳賞を博し、又帝展第四部には連年上選するのみならず、既に其推薦する所となり、新界の權威として尊重せらる。

X X X X X X X X

君の作品は古典を基準として更に獨自の創案によりて新味を打出し、何處迄も高雅優麗で、その練達の技巧を發揮し、其に接すれば何人をも恍惚たらしむる底の妙味を存す、門生亦た多數を有し、東都蒔藝界の權威として他の赤塚氏、六角氏等と雁行して斯界の尊敬を得、且つ從來宮内省其他知己精神の依頼により優秀作品を出して大なる賞讃を受く、其人格亦た閑雅真摯にして、恰も君の作品の高雅なるの一致渾融の感がある。

工 藝 名 鑑



【溝口安太良】

溝口安太良

出生地 京都市富小路四條上ル
現住 同上
明治卅三年六月生
鑄造家、龍文堂



君の家は鑄造(鐵瓶其他)の老舗にして享保年間に開始せられ爾來連綿二百有餘年に及び、君は其九代目にして龍文堂を繼ぐ、而して君の學統は大正八年に京都美術學校鑄金科を、又大正十四年東京美術學校同科を卒業したが、在學中は常に優秀の成績を挙げ、其クラスマスターとして推重された君は此の如く父祖傳統の藝術の外に嶄新なる新道の教養を受け、且つ熱心なる研究を積みて獨自の境地を拓くに至つたのである。

X X X X X X

現に日本工藝美術會委員、美工院同人、日本インターナショナル建築會委員、金藝會代表委員等にして其要地に立つてゐる、又其作品は帝展第四部其他各展に屢佳賞を博す。君は猶大に春秋に富み、且つ潤澤なる家産は君の藝術精進に資して滾々として盡きざるものあれば、其前途の大成を期待さる、青年作家の隨一人者である。

【佐々木象堂】

佐々木象堂

出生地 新潟縣佐渡郡河原田町
現住 東京府下瀧野川町東三軒家一八六五
明治十七年三月生
金藝家

君は通稱文藏、夙に郷黨の老大家宮田藍堂氏に就き鑄金ロー型を學んで其妙諦を會得し、後上京して現代の諸名流を敲き、且つ深く古今の名器研究に没頭して大に得る所あり、遂に一家風を打出す。

現に工藝濟々會、日本工藝美術會其他斯道團體の要地にありて重視せらる、又帝展第四部には連年上選、再び特選の光榮を博し、今や廣く海内の視線を集めらる。

X X X X X

其作風は古典に出發して獨自の境地を拓き、特に其技巧の精練されて意匠の嶄新なる、一に君の優越なる天稟と多年精進の結晶に出つ。

昭和四年帝展出品作の如きは隨に君が造詣の一斑を語らるゝものにして、其作の上に泰西藝術の長所をも善く攝取され、時代の趨勢に伴ひ、世界の藝術壇に調歩し得るの光輝を放つたのは快心の至で、此調子にて行く處迄行かんには必ずや世界的に誇るべき名品を出して人目を敬つるに至らむ。

秦 藏 六

出生地 京 都 市
現住 京都市富小路二條下ル
金 藝 家

京都金工界の長老にして、現に京都金工会名譽會長たり、當年既に八旬に近き高壽なるも體操壯者を凌ぐの概あり猶細密なる金屬彫刻に老を遣れんとしてゐる。

其作の古典的にして雅趣の横逸せるもの、古名匠の佛を倣せらるゝ。曾て市外某寺院の扉を作りて奉納し、渾身の精力を集注した、随つて其莊麗優美なるこも眼も眩せん計りて、時の 皇后陛下の御覽を得、賞讃の玉辭に浴した程である。

X X X X X

此他内外の博覽會、共進會等に屢佳作を出して名譽賞を得しこも枚舉に暇あらず、京洛工藝界に幾多の貢獻をなして世の推重する所なる。

令嗣常三郎氏亦た斯道の秀才にして、其家風に加ふるに更に時代の新彩を以てし斯界の注目を惹く、現に京都金工会の幹部員たり。今や工藝美術が一新紀元をなして躍進的發達の途にあるに際して、翁等父子を京洛に有するは斯道の 大なる誇りであらう。

工 藝 名 鑑

工 藝 名 鑑

河 合 卯 之 助

出生地 京 都 市
現住 京都府乙訓郡向日町寺戸南垣内二七
明治二十二年生
陶 藝 家



夙に京都繪畫専門學校を卒業し、陶磁製作の研究に没頭し、遂に新味濃潤たる一家風を樹つ、其作品は各種展覧會に出して屢佳賞を博す。帝展第四部には毎回上選。

X X X X X

君の作は其形体様式にも彩釉、模様等何れも多くは從來の型を脱して善く個性を發揮し、時代の風潮を表徴せる如き面白味あり、他の河井寛二郎、新井謹也氏等と相並んで京洛陶界の新らしき偉材として高視せらる。

近年窯を都外向日町の閑寂の境に築き、益其研究のため物我を遣れたるやの觀あり、一作出づる毎に驚異の目を以て迎へられつゝあり、其前途の大成を期待せらる。

飯田勝美

出生地 東京市
現住 大阪市北區相生町四十四番地
明治四年七月十八日生
金藝家、正七位勳六等

君は夙に東京美術學校卒業、前造幣局彫刻場長として長く其職にあり精勤す。現に大阪市美術協會幹事、大阪府工藝協會評議員、東美會々員、造幣局囑托、大阪市立工藝學校講師たり、各博覽會、展覽會には多く審査員の地にあり

X X X X X X X

快心の作として、先帝陛下へ大阪府より献上の座屏、銀地板に鶯鳥の舞姿を打出彫刻とし、裝飾に寶石を象眼す

裏面は桐に日輪の圖を謹製、又 聖上陛下御大典に府より献上の書棚に赤銅地板に大阪名所「天王寺」を彫刻す。

君は東京美術學校初期の卒業生で、爾來長き經驗工夫によりて独自の藝境を拓き、且つ深く古典的妙所を會得し

其反映は悉く作品の上に表現されて、優雅の中に堅實味に富み、歎賞に値するもの多し。

X X X X X X X

餘技として日本畫を善くし、時々線素の上に得意の筆を揮ふ。家庭は四男二女の子福者にして、亦た不斷の春風和

光に恵まる、の人なり。

工 藝 名 鑑



昭和四年十二月二十日初版
昭和四年十二月廿四日發行

「日本工藝名鑑」奥付

定價(上下貳冊壹軼入)金八圓也

著作兼
發行兼印刷人

藤井秀五郎

大阪市東區住吉町六十七番地

印刷所

美術日報社印刷部

大阪市東區住吉町六十七番地

不許複製



發行所

美術日報社

大阪市東區住吉町六十七番地
(電話東二五一―一帯)
郵替穴版六九二〇七番

終

